



平成 18 年度 第 1 回



平成 19 年度 第 2 回



平成 20 年度 第 3 回



平成 21 年度 第 4 回



平成 22 年度 第 5 回

5 年間の ふりかえり

平成 17 年 12 月、「国立美術館の教育普及等に関する委員会」が発足し、10 名の委員と 5 館の教育普及担当学芸員が、平成 18 年度から 22 年度まで 5 年間の第 2 期中期計画で実施すべき業務について検討した。平成 18 年 2 月、4 回目の委員会において研修の実施が決定。美術館と学校の連携を前提とした鑑賞教育をテーマとし、全国から教員、指導主事、学芸員が参加する 3 日間の研修とした。

※各年度のデータ（講師の所属等）は、研修が実施された当時のまま掲載。
第 5 回の日程表については 14 頁を参照のこと。



ギャラリートーク



ギャラリートーク

平成 18 年度 第 1 回

<手探りの1年目>

①美術館と学校の連携を前提とした「鑑賞教育」をテーマとして、②教員と学芸員が全国から集まる、③3日間の研修、という3つの特徴を持った本研修は、国立美術館にとって初の試みであり、すべてが手探りのスタートとなった。特にグループワークは、事前にファシリテータ（進行役）が何度も集まり、目的や進行方法について打ち合わせたにもかかわらず、苦戦するグループが多かった。主な理由は、教員と学芸員の考え方や専門領域の違いから来るものであったが、逆に、この違いを知ること自体が連携への第一歩では、と気付いたともいえる。

3日間とも東京国立近代美術館が会場であったため、開館日である2日目のグループワークは狭いバックヤードで行わざるを得なかった。課題を多く残した初年度であったが、受講者からの評価は高く、このような研修が待ち望まれていたことがわかった。



グループワーク 1日目



グループワーク 1日目



グループワーク 1日目

左 グループワーク 2日目

日程表 平成 18（2006）年度

第1日目 8月7日（月）		第2日目 8月8日（火）		第3日目 8月9日（水）	
会場：東京国立近代美術館		会場：東京国立近代美術館		会場：東京国立近代美術館	
		9:15	受付	9:15	受付
		9:30	講演② 奥村高明（文部科学省） 「総合的行為としての鑑賞」	9:30	講演③ 長田謙一（首都大学東京） 「函をひらくー（美術／館／教育）の名のもとに その逆説と可能性ー」
		10:30	（休憩）	10:30	（休憩）
		10:40	事例紹介① 美術館での実践 池田真規子 （神戸市立小磯記念美術館）	10:40 12:20	グループワーク発表 グループワークの成果を発表し、講評を受ける 講評者： 長田、奥村、三澤一実（文教大学）
		11:20	事例紹介② 美術館での実践 柳沢秀行（大原美術館）		
12:40	受付	12:00	昼食（休憩）	12:40	閉講式
13:00	開講式	13:00	事例紹介③ 美術館と学校の連携実践 田中晃（埼玉県立近代美術館） 田島均（さいたま市立大牧小学校）	13:00	（終了・解散）
13:10	オリエンテーション				
13:20	講演① 河合隼雄（文化庁長官） 「子どもの心と鑑賞」	13:50	（移動）		
14:10	ギャラリートーク見学 5本のギャラリートークを自由に見学する	14:00	グループワーク② 8グループに分かれて討議を行う		
15:15	グループワーク① 8グループに分かれて、ギャラリー内で鑑賞、討議を行う				
17:30	情報交換会（希望者のみ）	17:30	（終了）		

ギャラリートーク協力校
筑波大学附属小学校
埼玉大学教育学部附属中学校
目黒区立第八中学校



ギャラリートーク



ギャラリートーク

平成19年度 第2回

＜会場に新美術館が加わる＞

会場が狭すぎたとの反省を踏まえ、平成19年1月に六本木にオープンしたばかりの国立美術館が会場に加わった。これにより1日目は休館日の東京国立近代美術館で、2・3日目は国立新美術館（2日目は休館日）で実施することになった。

最大の課題であったグループワークの運営については、事前のファシリテータ会議で次のことが確認された。目的は立場や経験の異なる受講者どうしの「交流」であり、交流から目指すべき鑑賞の姿を討議すること。方法としては美術館空間を活用し、①課題作品をじっくりと鑑賞する→②鑑賞の意義を共有する→③鑑賞プログラムを考えつつ、連携の課題を話し合うように進めること。

結果、グループワークは、研修中最も楽しく意義ある活動だったとのアンケート評価を得る。反面、プログラム作りという課題が「指導案」作りに偏りがちで学芸員が参加しにくいという指摘や、業種別に抱える悩みや問題意識の解決に焦点化して欲しいという要望も残った。



グループワーク 1日目



グループワーク 1日目



グループワーク 2日目

左 グループワーク 3日目 発表

日程表 平成 19（2007）年度

第 1 日目 8 月 6 日（月）		第 2 日目 8 月 7 日（火）		第 3 日目 8 月 8 日（水）	
会場：東京国立近代美術館		会場：国立新美術館		会場：国立新美術館	
		9:30	受付	9:30	受付
		9:45	事例紹介① 美術館での実践 武居利史、成相肇 （府中市美術館）	9:45	講演 長田謙一（首都大学東京） 「覚醒する〈眼〉、あるいは〈視覚性〉をひらくことー〈美術／館／教育〉その逆説と可能性」
		10:25	事例紹介② 小学校での実践 日高和広 （宮崎大学教育文化学部附属小学校）	10:45	グループワーク発表 グループワークの成果を代表者が発表し、講評を受ける 講評者： 長田、奥村、三澤
		11:05	（休憩）		
		11:15	事例紹介③ 中学校での実践 中平千尋 （長野市立櫻ヶ岡中学校）		
	12:40	受付	11:55	昼食（休憩）	12:30
13:00	開講式	13:00	教材パイロット版紹介 三澤一実（文教大学） 一條彰子（東京国立近代美術館）	13:00	終了解散 （解散後希望者は、国立新美術館「日展 100 年記念展」「スキンプォーズー 1980 年以降の建築とファッション」等自由鑑賞）
13:10	オリエンテーション	13:30	グループワーク② 前日鑑賞した課題作品の鑑賞プログラムを作成する		
13:20	講演 奥村高明（文部科学省） 「創造的な行為としての鑑賞子どもから考える鑑賞教育」				
14:20	（休憩・移動）				
14:30	ギャラリートーク見学 5 本のギャラリートークを自由に見学する				
15:30	グループワーク① 9 グループ ・ギャラリー内で課題作品を鑑賞し、鑑賞の意味について考える ・学校と美術館の連携のあり方について考える				ギャラリートーク協力校 筑波大学附属小学校 埼玉大学教育学部附属中学校 目黒区立第八中学校 さいたま市立土呂中学校 坂戸市立住吉中学校
18:00	（終了）				
		18:15	情報交換会（希望者のみ）		



グループワーク 1日目



ギャラリートーク



グループワーク 1日目



グループワーク 2日目



分科会（小学校）

左 グループワーク 3日目 発表

平成 20 年度 第3回

<分科会で学習指導要領を確認>

教員と学芸員が、業種の壁を越えて意見を交わすのが本研修のよさではあるが、業種特有の課題についても話したいという声があった。一方、この年の3月に新しい学習指導要領が告示されたばかりで、鑑賞授業の指導と評価がどう変わるのかという点にも関心が集まっていた。そこで、小学校教員・中学校教員・指導主事・学芸員の4つの分科会を新設し、学習指導要領改訂の要点を確認した。この分科会は、専科教員の減少で孤立しがちな中学校教員や、他館と遠く交流が難しい学芸員にとっても、解決法を助言しあう貴重な機会ともなった。

日程表 平成 20（2008）年度

第1日目 7月28日（月）		第2日目 7月29日（火）		第3日目 7月30日（水）			
会場：東京国立近代美術館		会場：国立新美術館		会場：国立新美術館			
		9:30	開門	9:30	開門		
		9:40	受付	9:40	受付		
		10:00	業種別分科会 (小学校／中学校／指導主事／学芸員)	9:50	グループワーク発表準備		
				10:10	業種別分科会報告 前日の分科会の討議内容を進行役が発表する		
10:50	開門			10:30	グループワーク発表 グループワークの成果を代表者が発表し、講評を受ける		
11:00	受付			講評者： 長田、奥村、三澤一実（武蔵野美術大学）			
受付後、所蔵作品展自由観覧	11:10				（休憩・移動）		
		11:20	講演② 長田謙一（首都大学東京） 「〈視覚性〉はどのようにしてひらかれるかー（美術館／鑑賞／学校）の可能性のために」		国立新美術館展覧会 観覧 （初日受付時に配布する「ウィーン美術史美術館所蔵静物画の秘密展」招待券で自由観覧）		
12:30		開講式	12:20			昼食（休憩）	
12:40	オリエンテーション	13:30	事例紹介① 美術館の実践 前田比呂也 (沖縄県立博物館・美術館)			12:30	閉講式
12:50	講演① 奥村高明（文部科学省） 「子どもたちの創造的な鑑賞とこれからの鑑賞教育」					13:00	（終了解散）
13:40	（休憩・移動）			14:10	事例紹介② 小学校の実践 内部恵子 (大阪市立上福島小学校)		
14:00	ギャラリートーク見学 5本のギャラリートークを自由に見学する	14:50	（休憩・移動）				
14:50	（休憩・移動）						
15:10	グループワーク① 9グループ ・課題作品をじっくりと鑑賞し、グループ内での鑑賞の意義を共有する			15:10	グループワーク② 課題作品を鑑賞する小・中学生向けのプログラムを検討する		
18:00	（終了）	18:00	（休憩・移動）	ギャラリートーク協力校 筑波大学附属小学校 埼玉大学教育学部附属中学校 千代田区立九段中等教育学校			
		18:15	情報交換会（希望者のみ）				



グループワーク 1日目



ギャラリートーク



グループワーク 1日目



分科会（中学校）

平成 21 年度 第 4 回

＜グループワークをテーマ別に＞

ここまで3回の研修を終え、委員やスタッフは受講者の層が変化してきたことを感じていた。年々、鑑賞教育の実践経験のある人が増え、受講者の関心や課題が焦点化されつつあるという印象である。

そこで、研修の要であるグループワークに2つの改良を加えた。まずグループ数を14に増やし、グループあたりの受講者を9名程度に抑えた。さらに受講者に事前アンケートをとり、「ギャラリートークの実践」「鑑賞教材」「言語活動」など関心のある事項を調べ、これにファシリテータの得意分野をマッチングして、グループ毎にテーマを設けた。これにより、さらに緊密な話し合いが可能になると同時に、3日目には鑑賞教育をさまざまな角度からとらえた発表が見られるようになった。

またこの年より、「教員免許状更新講習」の対象となり、希望者14名が履修証明書を手にする事となった。



グループワーク 2日目 模擬授業

左 グループワーク 3日目 発表

日程表 平成 21 (2009) 年度

第 1 日目 8 月 3 日 (月)		第 2 日目 8 月 4 日 (火)		第 3 日目 8 月 5 日 (水)	
会場：東京国立近代美術館		会場：国立新美術館		会場：国立新美術館	
		9:30	開門	9:30	開門
9:50	開門	9:40	受付	9:40	受付
10:00	受付	10:00	業種別分科会 (小学校／中学校／指導主事／学芸員)	10:00	グループワーク報告 グループワーク内容を代表者が報告する
10:30	開講式 オリエンテーション				
10:50	講演① 奥村高明 (文部科学省) 「鑑賞教育の現在、美術館と学校の連携」			11:40	講演② 長田謙一 (首都大学東京) 『見る』ことの獲得に向けて 一現代視覚文化 - 社会における『鑑賞』をめぐる幾重もの『対話』
11:50	昼食・所蔵作品展自由観覧	12:00	昼食 (休憩)	12:45	閉講式
13:00	ギャラリートーク見学 6本のギャラリートークを自由に見学する	13:00	事例紹介① 小学校での実践 高松智行 (横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)	13:00	(終了解散) 国立新美術館展覧会 自由観覧
		13:40	事例紹介② 中学校での実践 濱脇みどり (西東京市立田無第一中学校)	14:00	試験 (教員免許状更新講習希望者について実施)
		14:20	事例紹介③ 美術館での実践 竹内利夫 (徳島県立近代美術館)		
15:00	(休憩・移動)	15:00	(休憩・移動)	15:00	(終了)
15:30	グループワーク① テーマ別に 14 グループ・課題作品をじっくりと鑑賞し、グループ内でのテーマを共有する	15:30	グループワーク② それぞれのテーマに沿って活動する	ギャラリートーク協力校 筑波大学附属小学校 埼玉大学教育学部附属中学校 千代田区立九段小学校	
18:00	(終了)	17:40	(休憩・移動)		
		18:00	情報交換会 (希望者のみ)		

平成 18 (2006) ～ 22 (2010) 年度

過去 5 回分のデータ

※所属等は当時のもの

2 回目以降は、変更がない限り所属等は省略（敬称略）

講演（講演者）

第 1 回

河合隼雄（文化庁長官）

奥村高明（文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官）

長田謙一（首都大学東京システムデザイン学部 教授）

第 2 回

奥村高明・長田謙一

第 3 回

奥村高明・長田謙一

第 4 回

奥村高明・長田謙一

第 5 回

奥村高明・長田謙一

事例紹介（報告者）

第 1 回

池田真規子（神戸市立小磯記念美術館 指導主事）

柳沢秀行（大原美術館 学芸課長）

田中 晃（埼玉県立近代美術館 学校・教育普及担当課長）

田島 均（さいたま市立大牧小学校 教諭）

第 2 回

武居利史（府中市美術館 学芸員）

成相 肇（府中市美術館 学芸員）

日高和広（宮崎大学教育文化学部附属小学校 教諭）

中平千尋（長野市立櫻ヶ岡中学校 教諭）

第 3 回

前田比呂也（沖縄県立博物館・美術館 学芸員）

内部恵子（大阪市立上福島小学校 教諭）

第 4 回

高松智行（横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校 教諭）

濱脇みどり（西東京市立田無第一中学校 教諭）

竹内利夫（徳島県立近代美術館 専門学芸員）

第 5 回

犬童昭久（熊本県立美術館 主任主事）

東奈美子（熊本市立力合小学校 教諭）

不動美里（金沢 21 世紀美術館 学芸課長）

グループワーク（ファシリテータ）

第 1 回

A 田中 晃

B 柴崎 裕（多摩市立第三小学校 教諭）

C 白濱恵理子（東京国立近代美術館企画課 研究補佐員）

酒井敦子（国立西洋美術館学芸課 研究補佐員）

D 西村徳行（筑波大学附属小学校 教諭）

E 今井陽子（東京国立近代美術館工芸課 主任研究員）

F 三澤一実（文教大学教育学部 助教授）

G 寺島洋子（国立西洋美術館学芸課 主任研究員）

H 山田一文（埼玉大学教育学部附属中学校 教諭）

第 2 回

A 西村徳行

B 柴崎 裕

C 谷口幹也（九州女子大学人間科学部 講師）

D 寺島洋子

E 三澤一実（文教大学教育学部 准教授）

F 山田一文

G 松永かおり（目黒区立第八中学校 教諭）

H 今井陽子

I 藤吉祐子（国立国際美術館学芸課 研究員）

第 3 回

A 柴崎 裕

B 藤吉祐子

C 西村徳行

D 谷口幹也

E 松永かおり（東京都教育委員会 指導主事）

F 寺島洋子

G 三澤一実（武蔵野美術大学 教授）

H 山田一文

I 今井陽子

齊藤佳代（東京国立近代美術館工芸課 事務補佐員）

第 4 回

A 山田一文

B 小野範子（茅ヶ崎市教育委員会 指導主事）

C 藤吉祐子

- D 三澤一実
E 齊藤佳代（東京国立近代美術館工芸課 研究補佐員）
藁谷祐子（国立西洋美術館学芸課 研究補佐員）
F 相田隆司（東京学芸大学芸術・スポーツ科学系 准教授）
豊田直香（京都国立近代美術館学芸課 研究補佐員）
G 寺島洋子
H 今井陽子
三上美和（東京国立近代美術館工芸課 客員研究員）
I 西村徳行
J 小池研二（横浜国立大学教育人間科学部 准教授）
K 弘中智子（板橋区立美術館 学芸員）
L 松永かおり
M 谷口幹也
N 柴崎 裕

第5回

- A 弘中智子
B 小野範子
C 藤吉祐子
D 西村徳行
E 柴崎 裕（多摩市立北豊ヶ丘小学校 教諭）
F 齊藤佳代
G 三澤一実
H 松永かおり
I 田中 晃（川越市立美術館 主任）
J 山田一文
K 小池研二
L 谷口幹也（九州女子大学人間科学部 准教授）
M 寺島洋子

ギャラリートーク（トーカー）

第1回

- I 柴崎 裕・寺島洋子
II 白濱恵理子
妹尾喜久子（東京国立近代美術館 ガイドスタッフ）
井澤由利子（東京国立近代美術館 ガイドスタッフ）
III 西村徳行
一條彰子（東京国立近代美術館企画課／国立美術館本部事務局 主任学芸員）
IV 松永かおり・三澤一実
V 山田一文

第2回

- い組 柴崎 裕・寺島洋子
ろ組 西村徳行
は組 安斉紀子（東京国立近代美術館 ガイドスタッフ）
川上好美（東京国立近代美術館 ガイドスタッフ）
に組 松永かおり
ほ組 山田一文

第3回

- い組 西村徳行
ろ組 柴崎 裕・寺島洋子
は組 山田一文
に組 松永かおり
ほ組 三澤一実

第4回

- い組 西村徳行
ろ組 奥村高明
藏屋美香（東京国立近代美術館 美術課長）
は組 柴崎 裕
に組 寺島洋子
ほ組 三澤一実
へ組 山田一文

第5回

- い組 西村徳行
ろ組 柴崎 裕・寺島洋子
は組 山本与志絵（東京国立近代美術館 ガイドスタッフ）
に組 保坂健二郎（東京国立近代美術館美術課 研究員）
ほ組 山田一文
へ組 松永かおり
と組 三澤一実
ち組 川上好美

分科会（司会）

第3回

- 小学校分科会 三澤一実／中学校分科会 小野範子
指導主事分科会 奥村高明／学芸員分科会 一條彰子

第4回

- 小学校分科会 三澤一実・西村徳行
中学校分科会 小野範子・山田一文
指導主事分科会 松永かおり
学芸員分科会 一條彰子・今井陽子・寺島洋子・
藤吉祐子

平成 18 (2006) ～ 22 (2010) 年度

5 年間の指導者研修を振り返って

奥村高明

国立教育政策研究所 教育課程調査官／文部科学省初等中等教育局 教科調査官



■本研修のはじめの頃の状況

あえて 2005 年前後の学校と美術館をめぐる状況をまとめれば「鑑賞教育って何?」「学校と美術館の連携って何?」であっただろう。実践は局所的で、多くはギャラリートークかアートゲームという二分された状況だった。また、学校と美術館の反発もあったし、作品や実践が優先して子どもが不在の実践も見られた。このような状況で「学校と美術館の連携を図る事業を国として立ち上げたい」という国立美術館のオーダーに、学校現場の先生、大学の先生などを集めた鑑賞教育に関する有識者委員会が発足した。

■関係性構築のための結節点として

委員会では、まず国立美術館がどのような役割を果たせるのか議論した。何らかの理論を構築し、それを提供するという考えもあった。しかし、学校と美術館の連携から言えば国立美術館よりもはるかに実践が蓄積されている美術館は存在したし、理想的なモデルというものをつくりだしてそれを現場に示すという考えに疑問もあった。結論としては、国立美術館は、現在各地で行われている実践や事例などを接続する結節点、あるいはハブとしての役割を果たすべきではないか、ということになった。一つひとつのかけがえのない実践をつな

ぎ、ひろげ、関係性を充実していく。志のある人々が一か所に集う。それによって、学校と美術館をめぐる状況が改善できるのではないかと考えたのである。それが、本研修会のはじまりである。

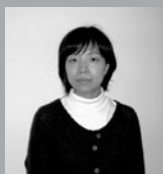
■教育資源を生かした多様なものへと変化

今だからこそ言えるが、当事者として、この研修がどのような成果を生むのか半信半疑だった。実際、はじめの頃の研修会の発言や質問などを見れば、参加者が手探り状態で参加しているのは明らかだった。しかし、年を経るごとに徐々に「自分の地域ではこのような実践を行っている」「鑑賞教育はこの点が大事ではないか」という意見が聞かれるようになった。筆者は仕事柄全国の教育現場を回るのだが、参加者が各地で発表をしたり、実践を広げたりしているという報告も相当聞きた。先日はその現場を調査してきたが、当時の参加者が鑑賞教育の熟達者として研修会をリードしていた。一方、実践の内容も学校と美術館の教育的な資源を生かした多様なものに変化している。そこには学校と美術館の制度や立場の違いを理解し合って協力するという姿勢も見られる。何より「子どもを育てるために学校や美術館は何かができるはずだ」という考え方が形成されつつあると思う。

おそらく、この 5 年間に日本の鑑賞教育は大きく変化したのだろう。それは学習指導要領の改訂があった学校現場や、個々の美術館の厳しい現状に対する挑戦などさまざまな理由があると思う。ただ、本研修もそこに一定の貢献ができたのではないか、参加者一人ひとりの小さな実践の積み重ねと、それらの触発の連続が「教育の生態系」を豊かにしたのではないかと思うのである。



ワールドカフェにて



ヒアリング レポート

過去 5 年間の受講生の

現在をレポートした

12 の事例

＊ 12 の取材先については、平成 22 年 5 月に過去 4 回の受講生を対象に行ったアンケートと、第 5 回研修のアンケートを参考に選定している。

ヒアリングレポート

研修のその後を検証する

はたしてこの研修は、当初の目的どおり、全国から関係者が集まることで鑑賞教育に関する互いの知見を深められたのか。また、地域の美術館と学校の連携を進めるリーダーを育成することに貢献できたのか。その検証のため、平成 22 年春、国立美術館は過去 4 回の受講者 500 名以上にアンケートを送り、結果を分析した。この追跡アンケートと第 5 回研修アンケートをもとに 12 名を選び、国立美術館の職員が直接出向いて、聞き取り調査を行った。以下、ヒアリング調査とアンケート結果について抜粋を報告する。

取材先一覧（実施期間：2010. 11. 18～12. 8）

受講研修	受講年度（平成）	対象者（現所属）／インタビュアー	取材日
第 1 回	18 年度	彦根珠絵さん（川崎市立今井中学校） インタビュアー：齊藤佳代	11 月 24 日
第 2 回	19 年度	森實祐里さん（札幌市立星置東小学校） インタビュアー：一條彰子	11 月 30 日
第 3 回	20 年度	長澤博昭さん（横浜市教育委員会） インタビュアー：齊藤佳代	11 月 24 日 12 月 8 日
第 3 回	20 年度	石尾乃里子さん（北海道立近代美術館） インタビュアー：一條彰子	12 月 1 日
第 3 回	20 年度	佐藤由子さん（ウッドワン美術館） インタビュアー：藁谷祐子	11 月 21 日
第 3 回	20 年度	河下添ちどりさん（廿日市市立宮島小学校・中学校） インタビュアー：藁谷祐子	11 月 22 日
第 3 回	20 年度	川村千津さん（船橋市立大穴中学校） インタビュアー：吉澤菜摘	11 月 18 日
第 3 回	20 年度	深山千尋さん（石川県立美術館） インタビュアー：今井陽子	11 月 27 日
第 4 回	21 年度	加納知世さん（小松市立板津中学校） インタビュアー：今井陽子	11 月 26 日
第 4 回	21 年度	石川文子さん（大阪市立此花中学校） インタビュアー：藤吉祐子	11 月 27 日
第 5 回	22 年度	数納貴美子さん（静岡雙葉中学高等学校） インタビュアー：朴 鈴子	11 月 26 日
第 5 回	22 年度	中野 詩さん（水戸芸術館 現代美術センター） インタビュアー：鳥居 茜	11 月 19 日

アートが好きな 大人になってほしいって思うんです

対象者：彦根珠絵さん（川崎市立今井中学校 教諭）

※研修時は川崎市立田島中学校 所属

インタビュアー：齊藤佳代（東京国立近代美術館工芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

地区内の連携で行っている研究テーマが「鑑賞」に設定されたことが具体的なきっかけ。近年評価の割合が大きくなっている鑑賞を、いかに扱えば生徒が取り組みがいを感じられるか考えるようになりました。しかし根本的には、美術と触れた時に楽しいと感じて欲しい気持ちが原動力になっています。

■研修で印象的だったことは？

何よりもグループワークが印象的です。一つの作品の前に座りじっくり鑑賞することで、普段教師として生徒の前に立つ姿勢とは全く異なるスタンスで作品と対峙することができ、鑑賞者としての原点に戻ったように感じました。ファシリテータのリードにより、作品と向き合い分析することで、さまざまな切り口を発見できたように思います。また、グループ内の他の参加者の方の実践について色々な話を聞くことができたことも非常に刺激的で、得ることが沢山ありました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

総合の時間で美術館に特化した校外学習を企画し、1年生全員が丸1日使って都内の美術館を班行動で訪れました。生徒は行きたい美術館を数件選びスケジュールを立て、事前に訪れる美術館の特徴や展覧会について調べ、校内で発表を行いました。また訪問後には、鑑賞した作品について情報を収集してまとめる事後学習も行いました。

美術館に行く習慣がない生徒が殆どでしたので、美術館におけるマナー等基本的なことも事前授業に取り入れ、電車で移動することも含めた一連の活動を、体育館でシミュレーションしました。大掛かりな準備になりましたが、これらの事前学習

によって美術館に対する緊張がとりのぞかれ、作品を鑑賞することに集中できたのではないかと思います。この試みは他教科の教員との協働で実現したわけですが、打合せを重ねる過程で、自分では思いもよらない着眼点からのアドバイスを受ける等、私自身が多くのことを学び、教員同士の相互理解や連携が実践の充実にいかに重要であるかを再認識しました。



■今後の課題について教えてください

美術が好きな生徒も多いので、彼らの思いに応えて本物を見る機会をもっと提供していきたい、そのために美術館との連携を深めたいと思っています。

また、これまでは西洋美術ばかりをとりあげがちでしたので、今後は日本の美術や現代美術、つまり生徒達にとってより身近なところにある美術を積極的に扱っていければと考えています。今日日本人であることを誇りに思える根拠の一端を、美術の授業を通じて与えることができればと願います。

鑑賞の授業の実践を通じて作家や作品に関する情報をどんなタイミングでどのくらい提供するか、日々考えていますがなかなか答えが見つかりません。中学生ならではの知的好奇心にも応えられるような鑑賞の授業が組み立てられればと思います。

■インタビュアーのコメント

転勤を経て、現在の所属校ではなかなか実践に結びつけることができないとおっしゃりながらも、表現活動とリンクさせながら隔週で鑑賞の時間を設けたり、オリジナルのワークシートを作成する等、可能なことから確実に実践されている真摯な姿勢が印象的でした。

このインタビューを機に 鑑賞授業を行うことに…

対象者：森實祐里さん（札幌市立星置東小学校 教諭）

※研修時は札幌市立三角山小学校 所属

インタビュアー：一條彰子（東京国立近代美術館企画課 主任研究員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

きっかけは8年前、前任校（札幌市立三角山小学校）で、2年生活科の「町探検」の単元として、徒歩5分の本郷新記念札幌彫刻美術館に行ったことがきっかけです。初めは彫刻の数などを数えていたのですが、美術館の館長や学芸員と仲良くなるうちに、子どもたちから彫刻の真似をしたり、彫刻の気持ちを考えたりするようになってきました。私自身はずっと、これは生活科の学習だと疑わなかったのですが、ある日指導主事が「これは図画工作科の鑑賞だよ」を教えてください、とても驚きました。

■研修で印象的だったことは？

グループワークで、絵の解釈を教えたいという強い思いを持つ教員や学芸員が、意外と多かったことです。私は解釈を教えることよりも、子ども自身が何を掴み取るかが大切だと思うと話しました。グループワークが進むうちに、作家や時代背景からの解釈に拘泥せず、絵の中に根拠を見つけて話し合えるようになっていきました。また、講演や事例発表を聞いて、自分の考える鑑賞教育が間違っていないのだと確信でき、勇気が出ました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

前任校で始めた彫刻美術館への訪問は、「総合的な学習の時間」としてカリキュラム化することができました。これにより3年生は、1年間を通して彫刻美術館に足を運んでいます。一方この春転勤した本校では一度も鑑賞の授業ができておらず、それが課題となっていました。しかし、このインタビューを機に鑑賞授業を行うことになり、しかも学校長の理解を得て、これを校内

研修会にすることができました。

今から思えば、研修で異なる考え方の人と合ったり話したりしたことが、鑑賞教育の考え方を広げるために役立っていると思います。また、講演などで得た知識は、自信を持って授業や発表を行う素地となっています。

■インタビュアーのコメント

このインタビューを機に開かれた校内研修会は次のとおりです。

実施日：平成 22 年 11 月 30 日

場 所：札幌市立星置東小学校

1 年授業公開（5 時間目）

「見つけよう友だちの絵（対話型鑑賞）」

6 年授業公開（6 時間目）

「アートカードを使って MY セレクション
を作ろう」

研修会（15：30～17：00）

- ・アートカード実践
- ・講義「明日からすぐできる鑑賞の授業」
ディスカッション



授業と講義はすべて森實先生。授業見学や研修会には、校長先生をはじめ校内の先生方が大勢参加され大変良い雰囲気でした。校内研修後、さっそく自分のクラスで鑑賞を行った先生もいるとのこと、明るくタフな森實先生を中心に、鑑賞の輪が広がっていくのを目の当たりにし、心強く感じました。

合言葉は「子どものために」

対象者：長澤博昭さん（横浜市教育委員会 指導主事）

インタビュアー：齊藤佳代（東京国立近代美術館工芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけや、
これまでの経験などを教えてください

展覧会や作品からしばしば大きな衝撃を受けた自らの経験を振り返り、このようなショック（感動や感激）を生徒にも味わってほしいとの思いがきっかけといえるかもしれません。自分自身の心が揺さぶられた体験を生徒とともにしたくて、一緒に鑑賞することから私の実践は始まりました。

■研修で印象的だったことは？

グループワークで長い時間をかけて一つの作品を鑑賞する体験が新鮮でした。正直なところ最初は今ひとつ興味を持ってずにいた作品でしたが、ある瞬間から発見が発見を呼ぶような、「みる」ことのすごさを体験させてもらえました。また他者と一緒に鑑賞することで、自分一人では得られない認識が呼び覚まされ、対話型鑑賞の可能性を目の当たりにし、感動を覚える瞬間もありました。ギャラリートーク見学でも同様に、対話型鑑賞の意義を確認することができました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

横浜市では、美術教育に関する指導資料集（横浜版学習指導要領）の作成をしています。今年度が3年目となりますが、1年目が学習指導要領の解説と具体的な事例紹介、2年目には美術館の協力を得て、実践例の提案やアートカードを活用した授業案などを盛り込みました。これからまとめる3冊目は評価についてとりあげる予定です。この横浜版学習指導要領は全教科分出版されており、全国的にみても稀な取り組みだと思います。

初めて作品を鑑賞するときと似ているのかもしれませんが、教員がゼロから授業を作り上げるのはかなりの重労働です。幾つかの提案をすることで、学習指導要領に関する理解を深め、そこから

個々の教員が授業として展開していただければと思います。

この資料集作成は、教育委員会と教員と美術館などとの連携なくしては成立しません。「子どものために」を合言葉に、美術を受取る大人として一緒に考えていこうという姿勢を皆で共有しているから、よいものが出来るのだと実感しています。

■今後の課題について教えてください

歴史的な価値の決まったものを受け入れるだけでなく、自ら鑑賞の対象をみつめるような、即ち自発的に鑑賞する力を獲得するきっかけとなる美術の教室でありたいと思います。このような能力を裏付けるのは、どれだけ作品などの価値にふれてきたか、そしてどれだけ感動する機会があったかの実体験に他なりません。教師の役目は、体験や体感の場をいかに提供できるかに鍵があるのではないのでしょうか。学校によっては本物に接する機会を設けるのが難しいところもありますから、それぞれの実態に応じた可能性を多様に検討する必要があると思います。

美術のあり方がどんどん変化する現在、パフォーマンス・アーツ等そのまの形で美術館におさまらないものをどうやって取り上げていくかも興味のある課題の一つです。



■インタビュアーのコメント

発せられる言葉の一つ一つが、実践と反省を繰り返しながらの豊富な経験と、確かな理論に裏づけされた強い説得力を伴うものでした。ご自身の美術に対する強い愛情が根底にあるエネルギーに、引き込まれてばかりのインタビューでした。

まず取り組み始めることが大事

対象者：石尾乃里子さん（北海道立近代美術館 学芸員）

インタビュアー：一條彰子（東京国立近代美術館企画課 主任研究員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

当館では、学芸員全員が交替で教育普及担当となります。最初の取り組みは、初任地、北海道立帯広美術館で任された子どものワークショップです。どうすればいいのかなあと試行錯誤しながら取り組みました。2006年に当館へ転動し、その夏にはミュージアムスクールを、冬には“アミューズランド”展を担当しました。

■研修で印象的だったことは？

グループワークなどでわかったのは、地域や美術館によって課題はさまざまであるということでした。美術館への交通手段であったり、人員不足であったり、連携自体への戸惑いであったり。確立されたノウハウがあるわけではなく、まず取り組み始めることが大事なのだと気がきました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

当館の教育普及活動は比較的に長い歴史があります。開館当初から、夏休みや冬休みに時期に合わせて、ファミリー層に向けた展覧会がシリーズで行われてきました。2007年の30周年記念“Born in Hokkaido”展では、初めての試みとして、市内8校の小・中学校と連携して鑑賞や制作のプログラムを行い、展覧会の最後の部屋で、その成果を紹介しました。私はこの展覧会の担当ではありませんでしたが、そばで見えて学校連携の大変さを感じており、その印象を持って2008年の研修に参加したのです。

研修までは、学校とどう手を繋いでよいかわからないと、二の足を踏む気持ちが自分にもありました。例えば、どの学校に声を掛けるべきか、どの学年を選択すれば良いのか等、迷うことが

多かったのです。しかし研修で、まずは取り組み始めることが大事と気づき、2009年に「土×炎＝？」展の学校連携担当となったときには、「まず相談」という姿勢で連携を進めていくことができました。具体的には、作家との打合せのなかで、学校・美術館・工房間の往来を考え、ご縁のあった学校に声をおかけしました。

■今後の課題について教えてください

道立美術館ですので、近隣の小・中学校との連携だけで良いのかということを考えていかなければならないと思っています。その一方で、ひとつの学校と複数年にわたる継続的な取り組みをしてみたいとも思います。美術館も学校も担当者がかわるので、関係が途切れがちなのが残念です。

■インタビュアーのコメント

教育普及の歴史がある美術館でも、時代ごとに新しい課題ができ、若い学芸員はそれぞれに課題を乗り越えているようすをうかがうことが出来ました。“Born in Hokkaido”展カタログや、それ以降のシリーズ展小冊子には、連携校の子どものワークショップや授業のようすが丁寧に紹介され、貴重な資料となっています。

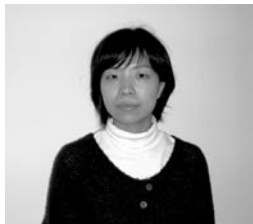


冬休みのファミリー向け展示カタログ

小・中学校との連携は今後も保っていきたい

対象者：佐藤由子さん（(財) ウッドワン美術館 学芸員）

インタビュアー：藁谷祐子（国立西洋美術館学芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

大学と大学院で教育学を学んだこともあり、鑑賞教育にはもともと興味がありました。

当館で勤務し始めてから、作品に対して自分なりの見方ができるようになるには、小さい頃から美術に触れる機会をもつことが必要だと感じ、小・中学生の鑑賞教育に力を入れるようになりました。

■研修で印象的だったことは？

学校の先生や指導主事、他県の方々と話せたことは、普段機会が少ない分非常に良かったです。グループワーク発表では他のグループの内容も分かりおもしろかったです。また時間や財政上の問題など、連携を行う上でのネックも参加者の方と共感できました。

一方、大学の先生、学芸員、小・中学校の先生による研究会、学校の先生方の研究会が盛んな地域があることを知り、地域差を感じると共に、全体で一丸となるにはどうすべきか考え始めました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

研修直後、美術館を広く活用してもらえよう小・中学校および大学の学校関係者の方向けに手引書を作成し、各学校に配布しました。また、絵葉書を利用してウッドワン美術館のアートカードをつくり、カードを借りる際の手引書や、カードを使った授業案などを学校に送りました。

そうしたところ、廿日市や隣市の図工部会から鑑賞教育のやり方を教えてほしいとのお話があり、子どもたちに分かりやすいジェスチャーやマッチング・ゲームなど、アートカードを主に使用した研修をさせていただきました。研修のエッセンスが感じられる授業報告を学校の先生方からいただ

いたときは、嬉しかったです。また、その研修をきっかけに、廿日市の学校では先生と一緒に授業を行い、中・四国の造形研究大会で、その一緒に行った授業の報告をしていただいたこともありました。

その後、アートカードの貸出はまだありませんが、カードを使った出前授業は何度か行っています。

■今後の課題について教えてください

出前授業の要望が伸び悩んでいるので、美術館からのアプローチを継続させる必要があると痛感しています。一方、昨年は美術館の活動を広く知ってもらうことに重点を置いたため、地元の小・中学校と数年間続けてきた連携授業を実施できなかったという反省がありました。この小・中学校との連携は今後も保っていきたいと考えています。新たな試みとして、地元の小・中学校に美術館を何かの発表の場として利用してもらったり、「中学生による作品解説」など展覧会の企画の中に子どもたちの力を取り入れたり、といった展開を考えています。また、研究会などを通して、美術館や学校に関わる人の意識が全体的に高まっていくといいなと思います。



■インタビュアーのコメント

研修、出前授業、教材開発とその広報など、さまざまな角度から学校の先生方にアプローチされている姿が印象的でした。現在、大学生に向けての活動もされています。今後、ウッドワン美術館の教育普及活動がさらに周知されていくことを願います。

子どもの創造力を伸ばすことをベースに

対象者：河下添ちどりさん（廿日市市立宮島小学校・中学校 教諭）

インタビュー：藁谷祐子（国立西洋美術館学芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、
これまでの経験などを教えてください

子どもは無意識に身の回りのデザインにこだわっています。美術が心を潤わせ、生きる上で必要なことを彼らに意識させたいという思いがありました。「身近な生活の中にある美術」をテーマに鑑賞授業を行ったとき、子ども達の反応が変わり鑑賞学習のやり甲斐や重要性を感じました。

■研修で印象的だったことは？

全国から集まった同じ志をもつ方達と一緒に時間を過ごせたことは、とても贅沢な経験でした。日本を代表する美術館が研修場所であったこともうれしかったです。三澤先生のギャラリートークが心に残っています。時間の中で何度も何度も子どもに話しかける姿が印象的でした。また、グループワークで一緒にグループだった方と鑑賞教育についてたくさん語ったことも忘れられません。この研修を通して、「鑑賞は創造すること」を実感しました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

市の美術教員約 10 名で、互いに授業を見学したりテーマを設けて研究したりしていますが、ここ 3 年「鑑賞」をテーマに進めている関係もあり、指導者研修のことをその場で報告しました。いただいたアートカードを使い実際に体験してもらいましたが、皆さん喜んでいました。

指導者研修で知ったウッドワン美術館の佐藤由子さんとも、出前授業 1 回、美術館訪問 2 回の交流授業を行う機会がありました。佐藤さん作成のワークシートは、学校の自分達では思いつかない内容だったので、勉強になりました。

また、廿日市ギャラリーに広島県立美術館の作品が展示されたとき、美術館から声をかけていた

だき、アートカードを借りて子ども達に授業を行いました。後日、子ども達（中学 2、3 年生）を連れて廿日市ギャラリーを訪れ、県立美術館の作品を鑑賞しました。そのときは美術館とギャラリーの学芸員の方からもお話をいただきました。

■今後の課題について教えてください

「地域の伝統を継承し、自分の将来と共に地域の将来も考えていく」ことが学校の目標であるため、宮島の宝物館展示などを使った鑑賞学習も、研究や調べ学習、また理解を深めるための知識提供型になってしまう傾向にあります。子どもに感じさせ、考えさせること、子どもの創造力を伸ばすことをベースにおき、美術においては鑑賞と知識習得のバランスを考え、取り組みたいと思います。

もともと中学校の教員でしたが、宮島に来て小学生の授業も受け持つことになりました。小学 1 年生から美術作品に触れられるよう、手助けをしたいと思っています。また、県立美術館のアートカードを活用した授業を考えてほしいとの要望があり、近い将来進めていく予定です。

■インタビュー者のコメント

フレッシュなエネルギーと温かいお気遣いが心に残っています。ご提案をいただき、今回一緒に、国立西洋美術館の作品を使って小学 6 年生～中学 3 年生の子ども達に鑑賞授業を行いました。この訪問を通して学校と美術館の連携が新たに生まれたこともうれしい思い出です。



鑑賞の面白さを伝えるために、種をまいていく

対象者：川村千津さん（船橋市立大穴中学校 教諭）

※研修時は千葉県立美術館所属

インタビュアー：吉澤菜摘（国立新美術館学芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、
これまでの経験などを教えてください

中学校の美術教諭になって 27 年目になります。その間、平成 19 年からの 3 年は千葉県立美術館に勤務し、22 年の春、中学校に戻ってきました。美術館に勤めてみて初めて、学校教育では美術は「作る」方に重きがあり、鑑賞についてじっくりと考えてこなかったということに思い至りました。

■研修で印象的だったことは？

グループワークで、子どもたちに作品を見せるときに自分たちからまず何を投げかけるかを考えたことが、一番面白かったです。「鑑賞とは何か」を一からじっくりと考えられるような取り組みだったと思います。鑑賞には、自己理解をして他者理解をして、さらには共感し合うといった要素がありますが、それらは学習指導や生徒指導にも共通する、非常に重要な要素であると感じました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

千葉県立美術館にいた間は、複製画を持参して小学校を訪ね出前授業を行ったり、近隣の中学校と協力して美術館での鑑賞プログラムを行ったりしました。鑑賞活動では、まず子どもたちに作品をよく見ることを経験してもらおうと思い、説明しすぎないように心がけました。指導者研修での経験を基に、自分なりに工夫してプログラムを考え、子どもたちの反応を見ながら進めるようにしました。美術館と学校とが互いにベストなやり方を模索しつつ協力して行ったこれらの活動は、学校で鑑賞に取り組むよいきっかけになったのではないかと思います。

また、中学校に戻ってからは、3 年生のクラスで鑑賞の授業に取り組みました。千葉県立美術館から複製画を借りてきて、作品の画像とワークシートを用意し

て行いました。美術館に行ったり、作品を見たりした経験が少ない生徒がほとんどなのですが、このときはよく作品を見ていました。よい作品には、その作品自体に指導力があるということを実感しました。

■今後の課題について教えてください

生徒を学校外に連れ出すには大変な事前準備が必要で、中学生が遠方の美術館を訪れるのは現実的には難しいと思います。しかし、複製画等の資料を借りる手続きは煩雑ではなく、出前授業もやり方を工夫すれば実現可能であると実際にやってみて感じました。美術館だけではなく地元の作家やギャラリーなどにもネットワークを広げて、利用できるものは利用し「美術とはこんなに素敵なもの」と伝えていきたいです。日々、たくさんの「美」と出会い、それを味わうことのできる人になるように、心に種をまいていくことが私たちの仕事だと思っています。

学校でももっと鑑賞の授業をしていきたいのですが、作品の大判の図版や、画像データがなかなか手に入りません。実際の作品が持つ素晴らしさを伝えられる教材があると、鑑賞の活動もさらに充実させられるのではないかと思います。

■インタビュアーのコメント

学校と美術館、両者の現場を経験した先生だからこそのお話を伺うことができました。目指す「鑑賞」のために何ができるのか、学校と美術館が互いに理解を深めたうえで、連携の足場作りを丁寧に行っていくことが重要だと感じました。



複製画に見入る生徒たち

鑑賞教育の推進と県立美術館の役割

対象者：深山千尋さん（石川県立美術館 学芸員）

インタビュアー：今井陽子（東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

十数年の教職歴（図工専科）を経て、平成 20 年度石川県立美術館の教育普及担当となりました。鑑賞教育への取組みは、主に現職に就いてから。現在は「出前講座」のほか、セルフガイドの作成、制作・茶会等の体験、バックヤードツアーなど常設展に合わせた鑑賞のプログラムを実践しています。

■研修で印象的だったことは？

研修参加は異動して間もなくのこと。実践数も少ない中、さまざまな方向性を知ることができました。グループワーク（テーマ：「子どもたちにとって美術館とは」）は高度な内容でしたが、美術館における役割を模索していた自身の問題と向き合ういい機会となりました。多くの示唆を受けた対話型鑑賞でしたが、実際に挑戦してみると、研修で得たイメージと現実の差に戸惑いも覚えます。そうした試行錯誤が、現在の取組みに結びついているようです。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

石川県の教育センターで開催された鑑賞教育の講座にスタッフとして参加しました。午前は研修内容を紹介しながら対話型の鑑賞を指導、午後は参加した教職者自身に挑戦してもらいました。金沢市を除いた全県から参加者があり、たいへん有意義でしたが、現在はこの研修が行われていないのが残念。勤務館でも対話型鑑賞やアートゲームなどの内容を盛り込んだ独自の教職員向け講座を開催しています。教室でも可能であること、また静かに作品を見るだけでなく、生徒たちの能動性を促す対話型鑑賞に関心を持つ参加者が多く、手応えを感じています。その一方で、出前講座などで接した子どもたちのようすから、オープンエン

ドの対話型から、主題の解釈に集約していくような流れを築きたい、鑑賞をもっと深めたいという気持ちも高まっています。本年の鑑賞講座「石川の工芸物語」は、前年の「工芸王国のひみつのたんけん」を踏まえ、鑑賞のアプローチ方法や情報量を増やす試みを行いました。

■今後の課題について教えてください

鑑賞教育をしやすい環境ばかりではなく、むしろこれからという地域にも広げていくのが県立美術館の役割です。出前授業の普及と充実もその一つですが、生徒たちの反応や学習効果を向上させるためには、彼らを日頃から指導している教職員の意欲を高めるような働きかけも不可欠であると感じています。また、石川県が誇る工芸の鑑賞にも力を入れたのですが、九谷焼が何かを知らず、漆碗を使ったこともない子どもたちが増えているのが実情のようです。作品保全の事情から実物を館外に出す難しさはあるので、例えば制作工程など教室でも活用できる資料を模索して、子どもたちの興味を呼び起こす方法を探っていきたいと思います。

■インタビュアーのコメント

限られた人員と予算の中で、利用者の反応や要望を取り入れたり、工芸の教材作成例のように、複数年度に渡って一つの問題を追及したりするなど、自らを更新していく姿勢が印象的でした。地域の特性や県立美術館の役割の認識が、意欲をますます高めているようです。



ネットワークが拓く可能性

対象者：加納知世さん（小松市立板津中学校 教諭）

インタビュー：今井陽子（東京国立近代美術館工芸課 主任研究員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけや、
これまでの経験などを教えてください

文部科学省の指導をきっかけとして、十数年前から県内並びに小松市内の美術担当教師が集まり、研究会を行っています。市内での開催は年4〜5回程度。指導案や各種情報の共有を通して、他校との鑑賞授業交流や美術館との連携を実践しています。

■研修で印象的だったことは？

対話型によるオープンエンドのギャラリートークは、やはり美術館ならではのものかもしれません。少し違和感を覚えた一方で、造形要素の分析に基づく作品解釈の構築という、自分にとっての鑑賞教育の方向性がより明らかになりました。グループワーク2日目に考えた「美術館のパンフレットづくり」は、それを深める機会になりそうでしたが、時間が短かったのが残念でした。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

平成21年11月20日、小松市立公会堂において、公開授業「三校でつながり合う鑑賞教育」を行いました。参加校は板津中学校、丸内中学校、御幸中学校の三校。さらに本陣美術館と宮本三郎美術館の協力により、各館が所蔵する小倉遊龜並びに宮本三郎作品がそれぞれの教室に運ばれ、事前授業が行われました。事前授業の内容は、ワークシートによる予備学習、作品観察を元に分析と言語への置換、日本画や抽象画制作の実践、また自らの作品を題材としたワークシートの作成などです。公開授業当日は、会場に運ばれた小倉・宮本作品の傍らで、各校の生徒がそれまでの授業の流れや成果を発表し、意見交流が盛んに行われました。鑑賞教育の交流は以前にも経験がありましたが、三校での同時開催、そして1年生と2年生という異

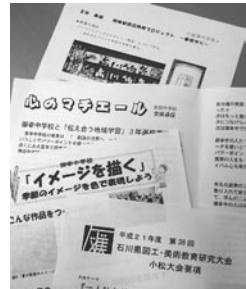
なる学年の生徒が参加したのは初めてでした。予算やスケジュール調整などの困難はありましたが、その分、協同作業の充実も高く、生徒達の視点も広がり、とても有意義だったと思います。

■今後の課題について教えてください

今日、美術を学習することは、子どもたちの創造性を養うだけでなく、思考力を高め、歴史や地域を知るという点でも再評価されています。鑑賞教育の推進が求められている理由もそこにあります。公式は一つではないことを、美術を通して伝えていきたいと考えています。一方で、中学校における美術の授業は週に1時間しかないのも現実。これからは、美術というものの大切さを、美術教師自身がアピールしていく必要があるのではないのでしょうか。そのためにネットワークの構築は、これからますます重要性を増すことと思います。刺激を受ける点でも、自身の活動に対する客観性という点でも、一人では拓けなかった可能性がそこに見出せるからです。

■インタビュー者のコメント

資料交換や情報提供、新しい授業を試みる際にも周知して互いに見学し合うなど、市内の美術担当教師間のオープンな協力関係が印象的でした。そうして築かれたネットワークが刺激を与え合い、高まった熱意が次の可能性を開いていくようすを、地域の学校同士や美術館との連携に見ることができました。



日々の積み重ね、環境づくりが鑑賞にとって重要

対象者：石川文子さん（大阪市立此花中学校 教頭）

※研修時は大阪市教育委員会 指導主事

インタビュアー：藤吉祐子（国立国際美術館学芸課 研究員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

教師に採用された当時から、制作と同様に鑑賞も大切だと思い、新年度の初めには教科書の表紙に掲載されている作品を鑑賞するなど、ごく自然に鑑賞を授業に取り入れてきました。また、録画した美術番組を見ることから、大阪市立美術館への学年単位での鑑賞まで、あらゆる形態で鑑賞に取り組んできました。

■研修で印象的だったことは？

小学生対象のギャラリートークで、大人が思ってもいないようなことを自由に発言する姿を目にし、大人が通常思うほど身構えなくても作品を気楽に見ていく楽しさを感じました。グループワークでは、他の参加者の実践や課題などを聞きながら、自分自身がこれから取り組んでいかなければならない課題などを想起するとともに、その責を負って職に励まなければならないと強く感じました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

教育委員会在籍時は、新任研修会、二次次研修会などにおいて、指導者研修会で見聞した全国の現場における鑑賞の状況や、それまでの思いを新たにした鑑賞の大切さなどをレクチャーする機会を数多く得ました。と同時に、その他、自主研修など、機会があるたびに、同様の話を取り上げ、なるべく多くの教員が鑑賞に興味を持ってくれるよう、語ることに努めて来ました。平成 22 年 11 月から中学校に教頭として赴任したので、今後は、校区の小学校との連携をはかり、小学校での制作、鑑賞への理解を深め、中学校との美術の結びつきを考えながら、中学校での指導にあたりたいと思っています。

■今後の課題について教えてください

鑑賞に限らず、生徒たちの些細な興味をいかに引き出していけるか、そのきっかけにはいかなるものがあり得るかを教師全員で考えていくことです。感性を伸ばしていくのは生徒たち自身ですが、その感性を引き出していく／いけるのは、大人である自分たちです。そのためには、大人自身が日々の生活の中で感性を磨き、ちょっとした場面でそのセンスの良さ／きらめきを見せていかなければなりません。ごく当たり前のことですが、教室や職員室の環境を整えたり、掃除をしたり、生徒が見るところに花を生けるなど、そういった積み重ねが、非常に重要だと思います。それぞれの生徒たちが、自分たちの日々の生活の中で目に触れるものに興味を持ち、楽しめるような素地を育成していけるような環境を大人自らが築き上げること、築き上げられるかは、鑑賞にも大いにつながっていくはずです。

■インタビュアーのコメント

石川先生は鑑賞教育が注目を浴びる以前から、美術の授業の中に制作と同じ位置づけで、鑑賞を取り入れ、「制作」、「鑑賞」と分け隔てなく、ごく自然な形で取り組まれています。それは、「鑑賞」というものを、他から切り離していきなり取り組む対象として扱うのではなく、ものを愛でたり、ものに対して自分の視点を持ったりする、日々の行いの積み重ねのなかに、生徒たちの「鑑賞」に対する姿勢も育まれていくという先生のお考えにもつながっています。今回、先生の鑑賞だけに限らず、教育に対するご姿勢から、「鑑賞教育」というものは、ただ「それのみ」ではなく、さまざまなものと豊かに関わりながら、取り組まれるべきことであると改めて認識させられ、非常に感銘を受けました。

私なりの鑑賞教育を展開していきたい

対象者：数納貴美子さん（静岡雙葉中学高等学校 教諭）

インタビュアー：朴 鈴子（京都国立近代美術館学芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、
これまでの経験などを教えてください

20 年間美術教師をしてきて、今までの自分の活動について振りかえる機会を探していました。なぜなら、自ら求めなければ自己満足に陥りがちな美術教員という立場で、「転換期」を求めることは非常に重要だと感じていたからです。また、静岡県の高美工研の集まりなどで、「鑑賞教育」についてお話を伺う度に、鑑賞の方法論を模索していました。授業に新しい風を吹き込むためにも、この研修への参加には期待を寄せていました。

■研修で印象的だったことは？

グループワークで、博識且つ懐の深い寺島さん率いる M グループに参加できたことはラッキーでした。グループワークでは、東近美・常設展示会場に展示していた写真を利用して、主に「写真を分類する」作業を繰り返しました。単純に「分類」といっても毎回見解を揺さぶり、深化させられるテーマが決まっており、同じ作品もまったく異なった視点で「観る」ことで、作家の制作意図をもあらゆる見方ができ、さらに作業するメンバーや人数もバリエーションがさまざまだったので、今後の鑑賞授業を行う上で有益なヒントを得ました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

今年度のシラバスはすでに決定していますので、鑑賞教育において実践的に取り組んだ活動例はありませんが、指導者研修の参加で得たヒントを元に、習得した知識やアイデアを来年度のカリキュラムに組み込む計画をしています。「美術」が副教科のような扱いを受けることも多い現代の教育現場で、私が勤務している静岡雙葉学園は、

美術専任教員が二人おります。また、女子校のため、学力はもちろんのこと、情緒や審美眼も大切にしており、美術や音楽も重要な教育要素として位置付けられています。今回の指導者研修の参加も、学校長の後押しがあって実現したものでした。この恵まれた環境を無駄にしないためにも、生徒の制作のみならず、鑑賞教育にも工夫を加えながら授業を展開していきたいと考えています。

■今後の課題について教えてください

今年度は実践例がないので、課題はこれから出てきます。学年によっては受験に伴い実施が難しくなる場合もありますし。また、静岡県には静岡県立美術館と、去年駅前にできた静岡市美術館がありますが、美術館に向かうタイプの鑑賞を行う場合、利用する美術館によっては時間と交通手段の考慮が必要です。当面は今まで行ってきた鑑賞（完成した作品を前に、生徒同士で意見や感じ方を交わすもの）に加えて、M グループでの活動例を参考に、鑑賞教育を展開していきたいと思っています。

■インタビュアーのコメント

研修中のグループワークや今回のインタビューを通じて、数納さんとはさまざまな話題でお話させていただきましたが、教員としての話をするときの数納さんが一番素敵だなと感じました。今までの 20 年間、いろいろな変化を取り入れながら、授業を展開してこられたのにも関わらず、まだ満足していないという姿勢が頼もしかったです。今後の鑑賞教育においても数納さんらしい工夫をされることを期待しています！

美術館と学校をつなぐ「あーとパス」

対象者：中野 詩さん（水戸芸術館 現代美術センター 教育担当学芸員）

インタビューア：鳥居 茜（国立新美術館学芸課 研究補佐員）



■鑑賞教育に興味を持ったきっかけ、

これまでの経験などを教えてください

個人的に興味を持つきっかけとなったのは、小・中学生対象の鑑賞教室にボランティアとして参加したことです。そこで、美術鑑賞が子どもたちのさまざまな可能性を開くようすを目のあたりにし、その面白さを実感しました。2009年11月より現職につき、未就学児から高齢者までを対象とした幅広いプログラムを担当しています。

■研修で印象的だったことは？

ワールドカフェでは、各地からいらした先生とお話する機会があり、そこで美術館へ行きたくてもなかなか行けないという声を多く聞きました。美術館に行くまでの交通手段や予算を確保することが非常に大変だと。美術館がたくさんあり公共交通機関を利用できる都市部と美術館が少なく車社会の地方とは、美術館への物理的・心理的な距離が異なるように思います。鑑賞プログラムの内容を考える以前に、美術館に行くための環境を整える必要性を改めて感じました。

■研修後、取り組まれた活動はありましたか？

小・中学校を対象とした「あーとパス」という企画を実施しました。これは、水戸市内の小・中学生の美術鑑賞の機会を増やすことを目的に毎年秋に開催しているもので、今年で3回目になります。私たち美術館側がチャーターしたバスで送迎を行い、研修を受けたガイドスタッフが来館した小・中学生の鑑賞をお手伝いします。ガイドを務めるのは、県内にある3つの大学から集まった学生を中心に、水戸芸術館現代美術センターで活動している市民ボランティアや館内で案内や監視業務を行っているスタッフです。それぞれのグループにガイドス

タッフがつき、対話しながら鑑賞を行います。今回「あーとパス」を行った写真展では、鑑賞を深めるきっかけとして「吹き出しカード」を用いて、写し出された人物の言葉や気持ちを想像したり、隠された写真の一部を想像して話しあったりと、ゲーム的な要素を加えるなどの工夫を凝らしました。

■今後の課題について教えてください

「あーとパス」に関しては、今後ガイドスタッフを増やしつつ、プログラムの質も保ちたいと考えています。ガイドを務める18～67歳の大人たちと参加する小・中学生は、普段の生活の中で交流することが少ないので、このように作品を介して対話できる機会はお互いにとって大きな意味があると思います。この企画は小・中学生のための鑑賞プログラムであると同時に、市民の学びの場という側面も持ち合わせています。今後の課題は、活動への協力と理解を得るために学校の先生方に向けて継続的な働きかけを行うことです。参加後の感想や意見を取り入れ、次へ活かしていけるようフォローアップしていきたいと思っています。

■インタビューアのコメント

こちらでは、学校向けのプログラムが数多く展開されています。来館を促すための取り組みとして、受け入れ側が体制やプログラムを整えることと、具体的な来館手段を提供することがバランスよくなされていると感じました。



「あーとパス」で来館した小中学生とガイドスタッフ

過去受講者への 追跡アンケート

調査の概要

参加者の特性

調査票

アンケート 1

アンケート 2

アンケート 3

アンケート 4

アンケート 5

アンケート 6

アンケート 7

アンケート 8

* 調査票の質問事項や記述式の回答は抜粋である。

調査の概要

【調査目的】

平成 18 年から平成 21 年に開催された「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」に参加した受講者に対しアンケートを実施。

その評価等の測定を行い意見の抽出を図るとともに、今後の美術館運営や指導者研修開催における基礎資料（データ）とする。

【調査対象】

平成 18 年から平成 21 年実施の指導者研修に参加した小学校教諭、中学校教諭、学芸員、指導主事

【調査時期】

平成 22 年 5 月

【調査手法】

指導者研修に参加された指導者にアンケートを送付し、郵送で回収。

【調査数】

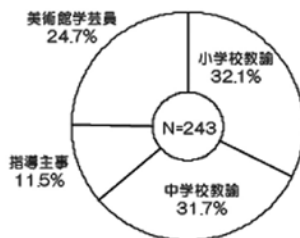
発送数：524

有効回収数：243（回収率 46.4%）

職業別	発送数	回収数
小学校教諭	147	78
中学校教諭	189	77
指導主事	76	28
美術館学芸員	112	60
計	524	243

参加者の特性

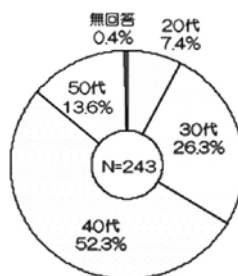
【職業別】



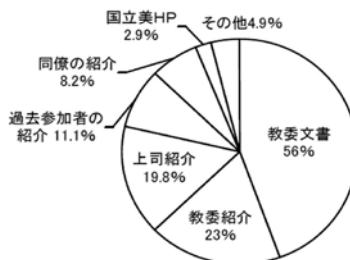
【研修参加年度】



【研修参加時の年齢】



【研修参加のきっかけ】



調査票 (抜粋)

Q 1)

研修に参加されたきっかけを下記の中からお知らせください。(○はいくつでも)

1. 教育委員会からの事務文書を見て

5. 同僚からの情報で
2. 教育委員会から直接勧められて

6. 国立美術館のホームページを見て
3. 勤務先の管理職から勧められて

7. その他
4. 前年以前の受講者から勧められて

Q 2)

参加された研修で有益だったプログラムを下記の中から1位～3位までお知らせください。

(1位、2位、3位の記入欄に各項目の番号でご記入ください)

1. 講演・事例紹介

4. 業種別分科会 (平成20年度以降)
2. ギャラリートーク見学

5. 情報交換会
3. グループワーク

6. その他

<ご回答記入欄>

1 位	2 位	3 位

Q 3)

研修参加後、同僚・知人にこの研修を薦めましたか。

1. 薦めた

2. 薦めなかった

Q 4)

研修に参加したことによって、鑑賞教育の知識やスキルが向上しましたか。

1. はい

2. いいえ

Q 5)

そのように思われた理由を具体的にお知らせください。

Q 6)

研修に参加した後、研修内容は職場で活用できましたか。

1. はい

2. いいえ

Q 7)

そのように思われた理由を具体的にお知らせください。

Q 8)

研修に参加した後、鑑賞教育について新しく取り組んだことがありますか。

1. はい 2. いいえ

Q 9)

そのように思われた理由を具体的にお知らせください。

Q 10)

研修に参加した後、他の研修生との連絡や交流がありますか。(○はいいくつでも)

1. メールなどで個人的に交流がある 3. 共同で授業や研究会などを行った

2. メーリングリストや研究会に加入し、 4. 特に交流はない
情報交換している

Q 11)

現在、地域での鑑賞教育に関する連携はありますか。

1. ある 2. ない

Q 12)

連携がある場合はその内容を、ない場合は理由を具体的にお知らせください。

Q 13)

現在、鑑賞教育に関して最も関心のある点、または課題と感じている点は何でしょうか。

Q 14)

今後、鑑賞教育に関して「国立美術館」に期待することは何でしょうか。下記の中から1～3位までお知らせください。(1位、2位、3位の記入欄に各項目の番号でご記入ください)

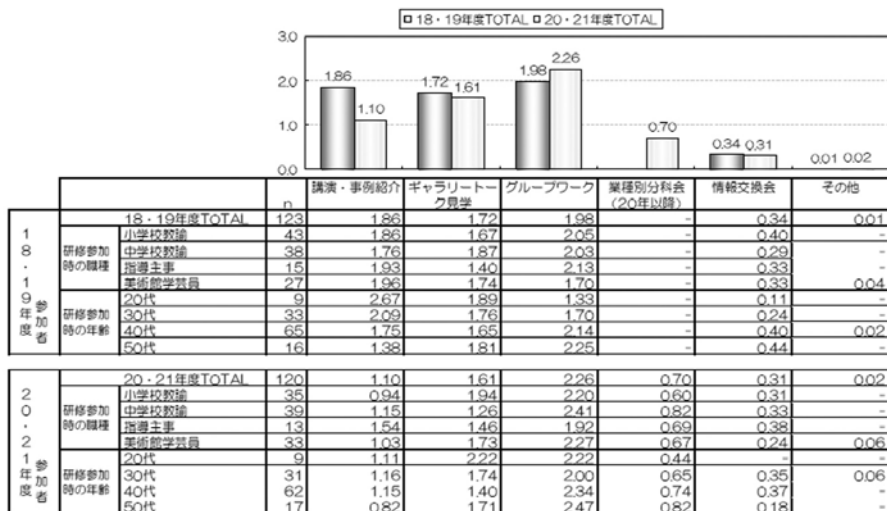
1. 「指導者研修」の継続 2. 専門的な研究会、シンポジウム講演など 3. アートカードなどの教材の開発・紹介・貸出し	4. 鑑賞教育に関する書籍や教員向けガイドの発行 5. 鑑賞教育に関する情報ネットワークの提供 6. その他 (具体的に)
---	--

<ご回答記入欄>

1 位	2 位	3 位

アンケート 1

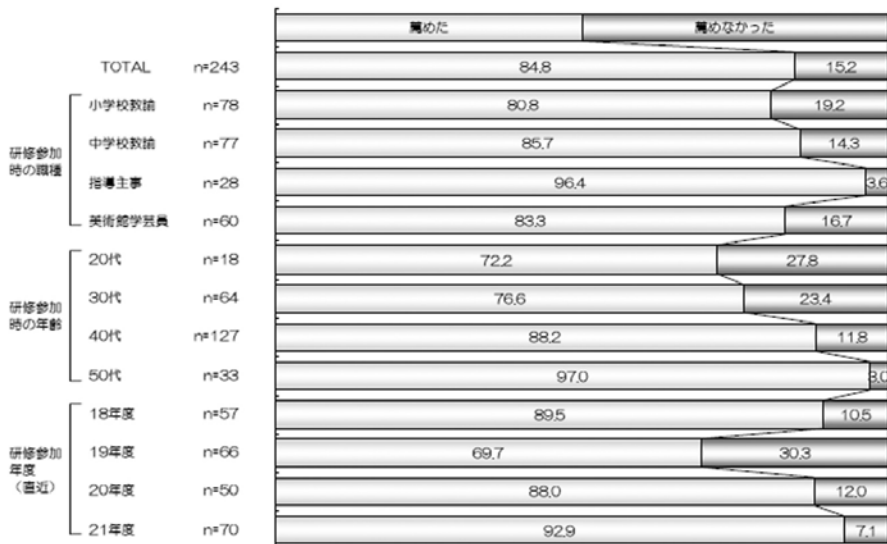
有益だったプログラム (加重平均値)



※加重平均値の算出方法
1位に3、2位に2、3位に1、順位なしに0、のウェイトを与え
その合計を該当サンプル数で除す

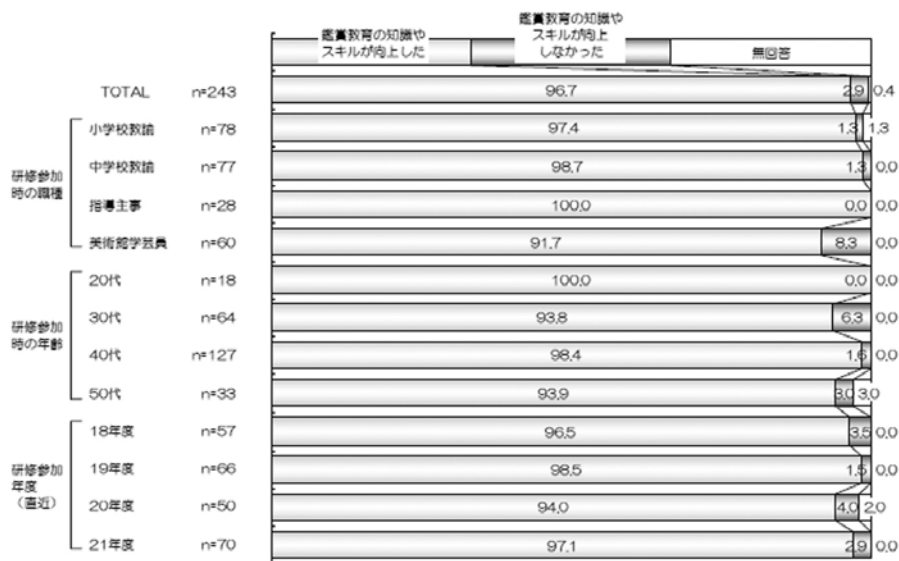
アンケート 2

研修参加後の同僚・知人へ研修参加の薦め有無



アンケート 3

研修参加による鑑賞教育の知識やスキルの向上有無



向上した理由

小学校教諭

授業の仕方がつかった

大切だとは思いつつ、さまざまな紙面を読むだけではイメージできなかった授業の仕方がつかった。(30代・18年度)

子どもの感じ方に共感

作品のどこから読み解いていくのか、子どもの目線になって考える体験(グループワーク)ができ、子どもの感じ方に共感できるようになった。(30代・19年度)

子どもの声を待てるように

子どもの声を待てるようになり、それぞれの見方、感じ方を大切にしながら、交流させるようになった。(30代・20年度)

日常的にやりやすくなった

小学校の図画工作での鑑賞教育についての方法がわかり、日常的な

実践や研究授業での取り組みがやりやすくなった。(40代・18年度)

実際に鑑賞の授業を行えた

その後、実際に国立美術館にある絵をもとに鑑賞の授業を行うことができた。(40代・19年度)

具体的に体験できた

小学生にどのように鑑賞教育を行っていけばよいのか、具体的に体験できた。(40代・20年度)

アートカードを授業に活用できた

アートカードに関する知識が向上し、実際に授業に活用することができた。(40代・21年度)

自分も美術館のよさ味わいたい

自分自身が美術館のよさを味わいたいと思うようになった。(40代・21年度)

美術館と連携できた

美術館と連携して対話型の鑑賞を

行うことができた。(50代・18年度)

イメージが大きく変わった

鑑賞とは黙って静かに見た後に思いを伝え合うと思っていた私にとって、体で思いを表現していくという鑑賞法があることが驚きであり、これまでの鑑賞のイメージが大きく変わった。(50代・19年度)

国立だからこそ唯一の場

全国からのこの方面に関心、知識がある方々との交流の機会は国立美術館だからこそできる、唯一の場だと思う。素晴らしい企画に参加でき幸せだった。(50代・20年度)

中学校教諭

とても有意義だった

当時、教師2年目だったので、ベテランの先生方とお話ができ、とても有意義だった。(20代・19年度)

具体的な取り組みをイメージ

多少ながら苦手意識をもっていましたが、研修に参加することで具体的な取り組みをイメージすることができた。(20代・21年度)

その後もメールで

多くの美術関係者に刺激を受け、その後もメールで意見や取り組みを知ることによって知識やスキルが向上した。(30代・19年度)

ゴールフリーに自信持てた

鑑賞教育を創造活動の起点として考え、ゴールフリーであることに自信が持てた。(40代・18年度)

骨格が見えた

鑑賞教育を学校行事として行う時の骨格が見えた。(40代・18年度)

生徒の学習意欲も高まった

これまで行ってきた知識習得型の鑑賞授業を大きく変え、対話型の授業展開を実践するようになった。生徒の学習意欲も高まったように感じる。(40代・18年度)

生徒の意見を引き出す方向に

情報を伝達することから、生徒の意見を引き出す方向に視点が変化した。(40代・21年度)

しっかりとつかむことができた

新学習指導要領への理解が、小学校からの流れでしっかりとつかむことができた。(40代・21年度)

地元の美術館との連携を

鑑賞教育に対する認識や考え方が変わり、地元の美術館との連携を本気で考えるようになった。(40代・21年度)

現代美術の鑑賞に積極的に

美術館という空間における鑑賞の意義や視点に対する理解が深まった。また、現代美術の鑑賞に積極的に向かえるようになった。(40代・21年度)

連携が理解できた

美術館連携が、具体的に理解できた。(50代・18年度)

研修に鑑賞授業を

鑑賞の授業に対しての取り組みの意識が出てきた。研修の一つとして鑑賞授業を優先するようになった。(50代・19年度)

指導主事

作品と向かい合うコツつかんだ

指導者というよりも、まず自分自身が作品と向かい合うコツをつかんだように思った。教えるというより、鑑賞者とともに学び、感動する姿勢が身に付いてきたように思う。(30代・19年度)

指導方法の工夫改善の参考に

新学習指導要領を踏まえた、指導方法の工夫改善について参考になった。(30代・21年度)

研修でのスキルを持てた

参加後、鑑賞教育に関する研修を企画運営するスキルと初任者研修等で講義ワークショップをするスキルを持てた。(40代・18年度)

実践的な指導方法が理解できた

講義やワークショップを通して、実践的な指導方法が理解できた。(40代・18年度)

言葉がけの意識変わった

グループワークにおいて対話による鑑賞を体験したことで、自身のものの見方が深まったり、子どもへの言葉がけの意識が変わったりした。(40代・19年度)

「お客」にならない

美術館側の見方、考え方を具体的に感じ取ることができた。教職員の側の構えが「お客」にならない工夫がポイント。(40代・21年度)

ギャラリートークができた

研修後、勤務地でギャラリートークを実際に行うことができるようになった。(40代・21年度)

それぞれの立場を尊重する必要

小学生のギャラリートークを初めて参観し、新鮮な対話の深まりに驚いた。ちょうど美術館との連携について模索していた時期であり、それぞれの立場を尊重する必要が分かった。(50代・18年度)

学芸員

自発的な感じる心を

子どもたちに「教える」のではなく自発的な感じる心を引き出すことが重要とわかった。(20代・20年度)

学校現場の実情を知った

学校関係者との会話で現場の実情を知ることができ、館に戻ってから先生と打ち合せをする際など、問題点をあらかじめ絞ることができた。(20代・21年度)

鑑賞教育について客観的に

自分がそれまで進めてきた鑑賞教育のかたちについて客観的に捉えることができるようになり、他の事例に学び、アイデアを取り入れることができた。(30代・18年度)

目的や時間の捉え方に違い

美術館と学校では目的にするものや時間の捉え方に違いがあることを実感できた。(30代・19年度)

生の声が聞けて参考になった

ギャラリートークや他館での事例はなかなか見学する機会が無い。生の声が聞けて参考になった。(30代・20年度)

問題点解決へのヒントとなった

既に鑑賞プログラムを自主的に行っていたが、問題点に対する解決策となるヒントとなった。(40代・18年度)

子どもの言葉を引き出す発問を

子どもの言葉を、引き出すための発問αバリエーションが増えた。子どもの心の中に浮かぶ、モヤモヤしたもの(=感じたこと)が表現しやすくなるように、言葉を考えている。(40代・20年度)

いろいろな方向から話を聞けた

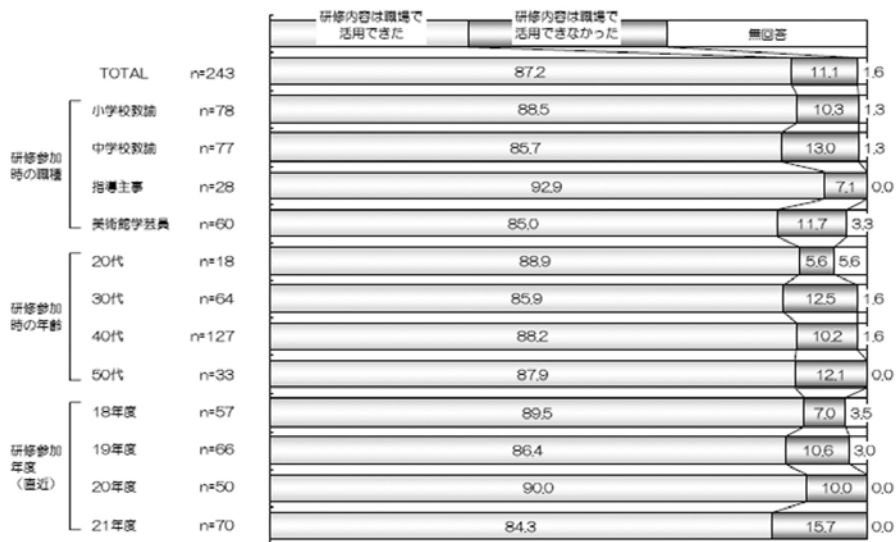
学校現場(教師)から美術館に入り、学芸員となったばかりで自分が授業で鑑賞の授業に取り組んできた経験があまりなかったため、鑑賞教育というものについていろいろな方向から話をきくことができた。(40代・20年度)

より感動が深まる

研修参加前は、ギャラリートークといえば、学芸員または解説員の一方的な説明方法が主流と考えていた。このように体験型で行えるという側の主体性が強くなり、より感動が深まると思った。(50代・20年度)

アンケート 4

研修参加後の研修内容の職場での活用有無



活用できた理由

小学校教諭

美術館で実践を行った

県立美術館に生徒を引率し（遠足として）実践を行った。（20代・18年度）

他教科にも活用できた

自分の学級だけでなく、他の学級でも行った。また、他教科の資料の読み取りにも活用できた。（30代・19年度）

プログラムやアートカードを

県立美術館のプログラムやアートカードを使った授業を実施した。（30代・20年度）

美術館で教員の研修会を

市立美術館で教員用の研修会を行った。（40代・18年度）

ギャラリートークを取り入れて

図工の授業の中で、ギャラリートークの形式を取り入れて、子どもた

ちに自由に思いを語らせることができた。（40代・19年度）

地域の美術館を利用

地域の美術館を利用した授業の実施。（40代・19年度）

積極的に鑑賞の授業を

研修で学んだことを生かして積極的に鑑賞の授業を行うようになった。（40代・19年度）

多くの意見を出せた

市立美術館の常設展の冬の企画委員の一人であったので、多くの意見を出すことができた。（40代・21年度）

鑑賞教育を授業に

実際に鑑賞教育を授業に取り入れることができた。（40代・21年度）

話すときの意識の変化

担任をしていた学級の授業の中で、話すときの意識の変化。また、鑑

賞の楽しさを校内研修で伝えることができた。（40代・21年度）

アートカードを研修に

アートカードを使った鑑賞について現職教員の時間をもらって研修した。（50代・18年度）

参観授業で保護者にも

鑑賞は楽しく取り組めるのだということを、参観授業で保護者にも見てもらった。（50代・19年度）

美術館でギャラリートークを

担任していた学年を美術館へ連れて行ってギャラリートークをしたり、校内研修で美術館へ行く等実践できた。（50代・21年度）

中学校教諭

発問のバリエーション増えた

アートカードを利用したり、生徒への発問のバリエーションが増え

た。(30代・18年度)

あまり難しく考えず
授業実践の数が以前よりも増えた。
鑑賞に対してあまり難しく考えず
に取り組めるようになった。(30
代・20年度)

分科会がヒントに
分科会で行った内容がヒントとな
り、授業を行うことができた。(30
代・21年度)

美術館で鑑賞の授業を
写真を使ったり、実際に美術館へ
行ったりして、鑑賞の授業を行う
ことができた。(40代・18年度)

よい刺激与えられた
職場での報告や、地域の美術教師
の集まりなどで研修報告をして、
他の教師に対してもよい刺激を与
えることができたと思う。(40代・
20年度)

改善された
授業の進め方やテストの出題内容
が改善された。(40代・21年度)

彫刻美術館と連携できた
絵画分野だけでなく彫刻美術館と
の連携ができた。実際に小品を出
前してもらい、鑑賞の授業ができた。
(40代・21年度)

生徒たちは楽しく
うまくはなかなかいえないが、み
ることと話すこと・伝えることを
取り入れて行っている。思ったよ
り生徒たちは楽しく取り組んでいる。
(40代・21年度)

生徒の言語活動の向上
鑑賞の授業に役立てることができ
た。また、生徒の言語活動の向上
の一翼となった。(50代・19年度)

効果的に取り入れることができた
校内の互見授業でプロジェクター
で作品を提示し、ギャラリート
ーク的な授業を展開することで学び
合い、伝え合いの学習を効果的に
取り入れることができた。(50代・
20年度)

ギャラリートークを美術館で
実際にギャラリートークを市美術
館で行った。(50代・21年度)

指導主事

子どもに対して柔軟な対応
小・中・幼稚園の子どもに対して、
柔軟な対応(鑑賞)ができたと思う。
作品からわかる情報や予想できる
ことなどから、話を膨らませ、深
めていくことができるようになって
きた。(30代・19年度)

事例として紹介できた
市の図画工作・美術科主任の先生
に、一部ではあったが事例として
紹介することができた。(30代・
21年度)

模擬体験の研修を企画
教職員研修の場で、(指導主事と
して)参加者に模擬体験をしても
らうよう研修を企画した。(40代・
20年度)

報告と鑑賞授業の実践できた
県指導主事会で研修内容を報告す
るとともに、現勤務美術館で中学
生を対象とした鑑賞授業を実践す
ることができた。(40代・21年度)

プログラムの企画や再検討
持ち帰った資料をもとに子ども向
けのプログラムを企画したり、今
あるプログラムを再検討した。(40
代・21年度)

「自分で見る楽しさ」を
県立美術館が立ち上げた美術館活
用推進委員会に学校教育の立場で
参加することができた。アートカー
ドを活用して、司書教諭研修会な
どの美術館教育にあまり関わりの
ない先生にも、「自分で見る楽し
さ」を伝えることができた。(50代・
18年度)

コツを教えてもらった
自分自身のギャラリートーク(子
ども向け)に大変役立った。コツ
を教えてもらった。(50代・20年度)

学芸員

共通理解を図れた
エドゥケーター全員が年度は違え
ど出席したことで、共通理解を図
ることができ、具体的には館主催
の教員研修に奥村先生や谷口先生
を招くことに繋がったり、意識の
高い参加者が積極的に美術館を活

用されたりと広がりをみせている。
(20代・19年度)

自分が主にギャラリートークを
研修前までは、ギャラリートーク
等は他の学芸員にやってもらって
いたが、研修後は自分が主に子ど
も向けギャラリートークを行って
いる。(20代・21年度)

変化していった
知識の伝達のみに限るのではない、
見る人からいろいろな意見を聞く
進め方(トーク)での、ギャラリ
ートークへと変化していったよう
に思う。(30代・20年度)

学校との連携を周知できた
「国立」が行っている威力もあって、
鑑賞ということが今後学校と連携
していく事であると職員や予算担
当者に周知できた。(30代・20年度)

「立ち寄り」を参考に実施
中学生の「立ち寄り美術館」を参
考にした鑑賞ワークショップを実
施した。(30代・21年度)

具体的な場面を考える研修
美術館ではこの研修の内容を紹介
したり、鑑賞の具体的な場面を考
える研修をした。本年度より学校
現場に戻り、今度は美術の授業で
実践していきたいと考えている。
(40代・20年度)

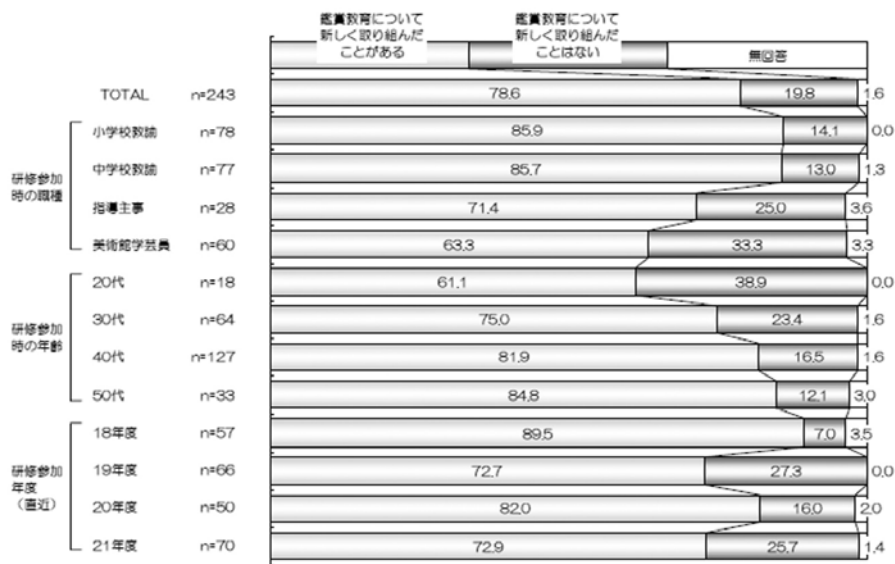
鑑賞の場で、出前講座で
来館した児童・生徒の鑑賞の場で、
また作品を持って学校に出かける
出前講座で作品を鑑賞する場面で
活用している。(40代・20年度)

出張授業で満足してもらえた
研修後、約20校(小・中・高校)
で出張授業を行い、内容に満足し
てもらえた。また、当館収蔵品展
の鑑賞プログラムを見直す契機と
なった。(40代・21年度)

ある程度問答型で
残念ながら、展示室内で通常の日
(開館日・年間無休)にひとつの絵
の前で、ギャラリートークを行う
のは、館の事情から難しい。しか
し、レクチャー室を利用すること
で、(実物はないが)ある程度問答
型で、鑑賞教育することができた。
(50代・20年度)

アンケート 5

研修参加後の鑑賞教育に関する新しい取り組み有無



新しい取り組みの具体例

小学校教諭

新しい鑑賞プログラムを自作
新しい鑑賞プログラムを自作して授業として実践した。(20代・18年度)

鑑賞から紙芝居での発表へ
ポストカードを使って鑑賞し、そこから話づくりをした。そして、それを紙芝居にし発表した。(30代・19年度)

身体表現を取り込んだ鑑賞
身体表現を取り込んだ鑑賞を授業で実践した。(30代・19年度)

アーティストとの交流を
市内にある芸術村に滞在しているアーティストとの交流を行った。(30代・21年度)

遠足などで市の美術館へ
遠足などを利用して、市の美術館等へ行き作品を見せることを校内

で提案し実現した。(40代・18年度)

美術館と連携して鑑賞教材を
県の美術館の連携として鑑賞教材を構成し、取り組んだ。子どもたちは鑑賞や美術館に興味を抱いたようで、その後も美術館に行ったり、鑑賞作品を基に自分の作品作りに励む子どもの姿も見られるようになった。(40代・18年度)

日頃の授業に気軽に鑑賞を
子どもの作品からいろいろな見方ができるから、日頃の授業に気軽に鑑賞を取り入れている。(40代・18年度)

オリエンテーリング式鑑賞
クラスの子どもたちにオリエンテーリング式鑑賞を行ってみた。子どもたちは、ヒントとクイズにより楽しんで作品を鑑賞した。(40代・20年度)

鑑賞からスタートする授業を
鑑賞をスタートにした、造形あそび（みることを視点にして）を授業実践した。(40代・21年度)

中学校教諭

校外学習や授業で鑑賞を
校外学習を美術館めぐりにしたり、授業で絵画鑑賞など多く取り入れている。(30代・18年度)

本物の作品でなくても…
本物の作品ではなくても、絵ハガキやポスター、TV番組などの作品をどんどん見せるようにした。(30代・18年度)

子どもたちに美術の映像を
視覚映像等の編集や整理をしたことで、授業の片付け後、または開始等に30秒～8分程度、子どもたちに興味のある美術の映像を見せ

ている。最近では、ipod を利用している。(30 代・19 年度)

生徒が主体的に活動する授業を対話型、話し合い活動、検定など、自分なりに生徒が主体的に活動するような授業を実践するようになった。(30 代・20 年度)

鑑賞カードで自由に表現

鑑賞の授業で、鑑賞カードを使い、感想や、考えたことを、自由に書かせている。感想は文章だけでなく、絵(漫画を含む)でもよいこととして、自由に表現させている。(40 代・18 年度)

さまざまなタイプにチャレンジ

さまざまなタイプの鑑賞学習にチャレンジするようになった。(40 代・19 年度)

意見交換してから学習する

知識的なものよりも、まず作品と対面して感じとれるものを意見交換する場を持ってから学習をすすめるやり方を取り入れた。(40 代・19 年度)

ワークシートを自作

写真図版に、マンガの吹き出しを付けたワークシートを自作し、そこにあてはまる内容を考えてみよう、という実践を行ってみた。(40 代・20 年度)

作品の模写を授業で

市の美術館と連携し(本物の作品を借り学芸員を招聘して)対話型の鑑賞の授業を行った。作品の模写を授業で行った。(40 代・21 年度)

現代美術の鑑賞を

これまで行わなかった現代美術の鑑賞を行った。(40 代・21 年度)

鑑賞用テキストの制作

3 年間のカリキュラムの確立とその中で特に 2 年生の美術館鑑賞を通した鑑賞用テキストを制作した。(50 代・18 年度)

活動を広げた

具体的に作家を招待して、特別授業を仕組んでみたり、美術館での鑑賞教育を行うなど、活動を広げた。(50 代・19 年度)

指導主事

実践報告集の作成をした

多くの実践を集め、実践報告集の作成をした。(40 代・18 年度)

研修講座の実施

県立美術館と連携した研修講座を実施した。(40 代・18 年度)

市の資料編に鑑賞題材を

市として、教育課程編成をサポートする資料編を策定したが、その中に鑑賞題材を盛り込んだ。(40 代・19 年度)

中学校教諭と共同で実践を

これまで美術館で実践してきたワークシートを活用した鑑賞から一歩進んで、ギャラリートーク形式で鑑賞を実践した。また市内中学校美術教諭に紹介するとともに、共同で授業実践を行った。(40 代・21 年度)

連携について積極的に話す

学校現場に指導する際、美術館との連携について積極的に話すように心がけている。(40 代・21 年度)

指導案を作成した

美術館に行く前の準備体操としてアートカードを活用して鑑賞に親しめるようにするため、授業の参考になるように子どもたちの発達段階を踏まえた指導案を作成した。(50 代・18 年度)

言語活動の手引きに鑑賞活動を

教育委員会として言語活動の手引きを作成中であるが、図工・美術科としては鑑賞活動を取り上げた。(50 代・19 年度)

学芸員

アートカードで研修を

当館で作成しているコレクションの絵ハガキを元にアート・カードを作成した。そのアート・カードを用いて地元小学校の夏季実技研修会(図工部会)で研修を行った。(20 代・20 年度)

対話を中心にギャラリートークを

トーク技術、参加児童数などで、なかなか上手くはいかないが、児童とは対話を中心にギャラリートークを行っている。(20 代・21 年度)

対話式のスタイルで

小・中学生対象のギャラリートークに子どもの感性を引き出す対話式のスタイルで取り組んだ。(30 代・18 年度)

館内で勉強会を開く

鑑賞教育のボランティアスタッフのスキル向上を目指して、(館内で)勉強会を開くようになった。(30 代・18 年度)

学校と情報を共有できるよう

先生方と交流を持つべく奮闘中。図工部会に参加したり、普及活動のチラシを美術主任宛に配布したり、ホームページに学校との連携のページを作成し PR するなど、学校と情報を共有できるように努めている。(30 代・19 年度)

先生による鑑賞教室を美術館で

少しずつ学校の先生による美術館での鑑賞教室等も始めている。(30 代・19 年度)

子どもたち同士の対話を交えて

親子参加を想定し、子どもたち同士の対話を交えた一般参加のプログラムを展覧会関連事業として開催した。(30 代・19 年度)

説明しすぎず、考えさせる

児童用の鑑賞プリントを作成した。その際、説明しすぎず、考えさせる部分を残すこと、「復習」のコーナーを設け、学んだことを一人で試みることができるようにするなどした。(30 代・20 年度)

子どものためのプログラムを用意

まだ充分ではないが、指導者あるいは専門家のための子どもプログラムではなく、子どものための子どもプログラムを用意し、子どもたちが楽しめるように取り組んでいる。(40 代・18 年度)

学校対応専門の班を新規に

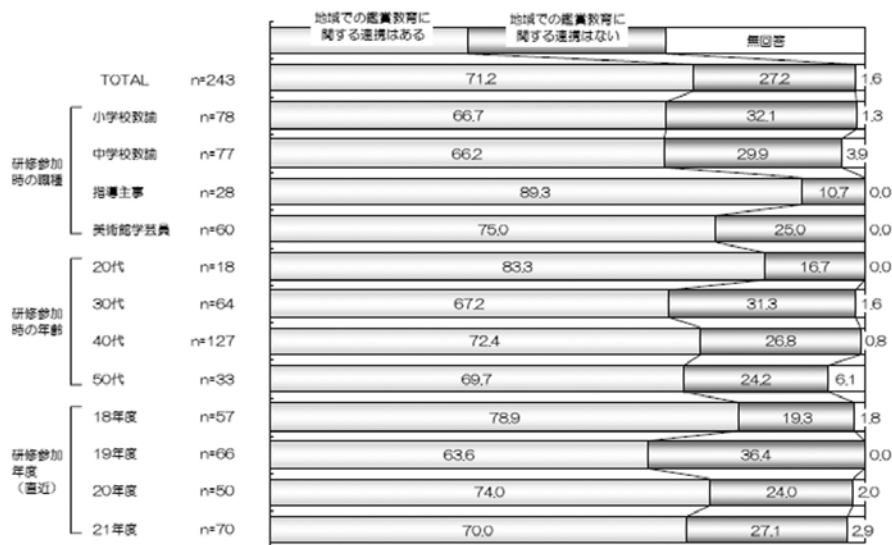
平成 22 年度より、ギャラリートークのボランティアグループに学校対応専門の班を新規に作った。(40 代・21 年度)

視覚障害者と鑑賞活動を

視覚障害者とともに行う鑑賞活動を実施した。(40 代・21 年度)

アンケート 6

現在、地域での鑑賞教育に関する連携有無



連携している

小学校教諭

利用しやすい環境が整えられてきた小学校図工の担当者会の自主研修や小学校ごとの美術館を利用した授業が展開されている。また地域の美術館からの詳細で丁寧な案内が増えて大変利用しやすい環境が整えられつつあると感じる。(30代・18年度)

美術館と相談している

美術館と相談し、どのような展示が、小学生の鑑賞活動に適しているか、どのように活動したらよいかを話し合っている。市・県で無料パスも送迎してもらえるので、学芸員と打ち合わせを行い、利用している。(30代・21年度)

学芸員とも幅広く意見交換

図画工作科や美術科の教諭などが集まり、グループを作っている。

その中で、美術館の学芸員とも交流し、鑑賞教育、美術館利用などについて幅広く意見交換したり、展覧会開催などを図ったりしている。(40代・18年度)

学芸員を招いて授業公開

全部ではないが、美術館の学芸員を招いての鑑賞の授業公開があった。教職員向けの美術館研修もあった。(40代・19年度)

美術館の指導主事が説明

県立美術館に教育主事がいて、学校での鑑賞教育にゲストティーチャーとして来たり、子どもたちの見学時に案内・説明をする。また、教師のための鑑賞研究会も開いている。(40代・20年度)

市立美術館と連携

市立美術館と連携し、指導主事と連絡を取り合って鑑賞教育を行っ

ている。(40代・21年度)

実践について情報交換している

県内で研修と一緒に参加した先生方と連絡を取り合い、それぞれの実践について情報を交換し合っている。それをもとに小教研図工部などで、輪を広げていこうと計画している。(50代・21年度)

美術館で月1回の活動を

美術館で、数年前より「ワーキンググループ」として月1回の活動を行っている。(50代・21年度)

美術大学との連携

美術大学と連携を図りながら実践している。(50代・21年度)

校区内の美術館と連絡

美術館が校区内にあるので、学芸員の方に鑑賞を希望する学年との連絡調整を行った。(50代・21年度)

中学校教諭

授業と連携できるプログラム

市立美術館等で、授業と連携できるようなプログラムがある。(20代・21年度)

アートギャラリーとの連携

近隣のアートギャラリーと連携している。(30代・18年度)

鑑賞教材を借りて授業を

県立美術館が比較的近くにあるため、鑑賞教材を借りて授業を行ったりした。(30代・18年度)

学芸員と話す機会が多くなった

公の美術館の学芸員と話す機会が多くなった。(40代・18年度)

研究を進めている

市の美術館と中学校の連携グループで少しずつではあるが研究を進めている。(40代・18年度)

ギャラリーへ生徒を案内

地域の美術ギャラリーの学芸員が、作品展毎にギャラリーへ生徒を案内している。(40代・19年度)

モデル授業を考えた

最近、県立美術館の事業に協力して、教員が使える「美術館を利用した授業プラン」のモデル授業を考えた。(40代・19年度)

わかりやすく感じやすいものに

美術館が移動して学校等に来たり、作家を交えての創作を行ったりしている。美術館の展示の仕方も変わり、訪れた生徒にとってわかりやすいもの、感じやすいものになっていると思う。(40代・20年度)

美術館での研修に参加

県立美術館での研修などがあり、参加している。(40代・20年度)

美術館や博物館との連携

今年度も市の美術館や県立博物館と連携した鑑賞の授業を考えている。(40代・21年度)

研修の場の提供や講師も

美術館の方に研修の場を提供してもらっている。講師も引き受けてもらっている。(40代・21年度)

学芸員とのつながり

市の教育研究会・美術図工部会にて、鑑賞教育の充実と向上をめざ

し取り組んでいる。地域の美術館の学芸員ともつながりがあり、年に数回、ともに研修会を行っている。(40代・21年度)

1学年全員を美術館へ

昨年、県立近代美術館の「美術館に行こう」に1学年全員(110名)を参加させることができた。(50代・20年度)

人材を紹介しあっている

地域の人材の情報を美術部会で紹介しあっている。(50代・21年度)

指導主事

美術館や学芸員の活用検討

地域の美術館等とコレクションや学芸員の活用等について行政レベルではあるが、検討が図られるようになった。(40代・19年度)

部活や授業での美術館活用

市内全小学校(各学年分)が美術館に来館する機会を教育委員会が計画実施するとともに、美術館ワークショップ等への中学生の参加(部活)や授業での活用を進めている。(40代・21年度)

継続的に行われている

私立美術館のギャラリートークや県立美術館の教員向け講習など、継続的に行われている。(40代・21年度)

新任研修に学芸員がレクチャー

新任自主研修会の際に美術館で学芸員からギャラリートークについてレクチャーしてもらった。(40代・21年度)

学芸員の授業支援、専用バス

市の美術館の学芸員と日程を調整し、授業を支援してもらったり、美術館でのギャラリートークを行っている。専用のバスで児童、生徒の送迎をしている。市内中学生が推薦した作品を美術館側で、特別企画展として催した。(50代・19年度)

学芸員

市民ボランティアの協力

市内の小学6年生は全員美術館へ来ることになっている。その他幼

稚園や高校・中学校の生徒も来る機会が多い。また、その対応の一部を市民ボランティアに協力してもらっている。(20代・21年度)

連携の成果を展覧会に反映

市立小・中学校からの鑑賞プログラムへの参加希望が増えた。市教育研究会中学校造形部会との鑑賞教育での連携を進めている。昨年度は連携の成果を所蔵作品展に反映させた。(30代・18年度)

先生と研究会を立ち上げた

学校の美術の先生方と美術館利用研究会を立ちあげ、鑑賞教育での利用について模索している。(30代・19年度)

年中行事の一つとして

近隣の小・中学校の授業入館、学芸員の学校への出張授業を行い、各校の年中行事の一つのようにしてもらっている。(30代・20年度)

小・中、大学とも連携

小・中学校では、展覧会に際して授業の時間で学芸員や作家が出向く、または生徒に美術館へ来てもらい制作や鑑賞のワークショップを行った。大学とは、常設展を使い、ギャラリートークを実施してもらった。(30代・20年度)

ホームページで共有や情報交換

美術教師が中心となってホームページを立ちあげ、教材の共有や情報交換などを行っている。(30代・21年度)

出前鑑賞授業と展覧会を共同で

美術館+義務教育課+学校+大学による出前鑑賞授業と展覧会事業を平成22年度より開始。(30代・21年度)

学校での鑑賞教室の実施

年間の予算をとり、県内の学校へ赴き、鑑賞教室を実施している。小・中学校・養護学校など21年度には約20校の応募があった。(40代・18年度)

ワークショップや出前授業

ワークショップや、地域の学校へ出前授業を行った。ここ2、3年ストップしているので再開したい。(50代・20年度)

アンケート 6 現在、地域での鑑賞教育に関する連携有無（つづき）

連携していない

小学校教諭

異動と1年生の担任で機会がない
異動により美術館から遠くなり、
現在1年生の担任で機会がない。
(30代・19年度)

鑑賞より表現の方にニーズ

鑑賞教育よりも表現の方に興味のある先生方が多く研修会のニーズは、そこに常にある現状が打開できないでいる。(30代・19年度)

手がまわらない

多くの人の協力と理解が必要であり、日々の学校課題等でそこまで手がまわらない。全体的に図工・美術に対する意識が主要教科に比べ低い。(30代・20年度)

異動で場が減った

職場の異動により、直接図工・美術についての授業指導をする場が減った。(40代・19年度)

意欲がなかなか高まらない

県美術館からの働きかけは行われているが、学校側（教師）の意欲がなかなか高まらない。(40代・21年度)

連携というほどにはまだ…

小学校の図工部会で鑑賞を取り入れた取り組みを進めているが、連携というほどの状況にはまだなっていない。(50代・18年度)

巡回美術館があれば

地域の美術館が近くになく、行くとなると1日仕事になる。それでも行きたいと思うが、150名～130名（学年）なので、グループ数が多すぎて受け入れが難しいようだ（見るだけならいいが語り合うことができない）できたら巡回美術館があればと思う。(50代・21年度)

中学校教諭

雑務に追われて

雑務に追われて連絡をとりあえていない。(30代・18年度)

美術館と場所が離れている

美術館と本校との場所が離れているため、連携を取りにくい環境にある。(30代・21年度)

日々の授業等で精一杯

小さな郡なので、美術教諭は、1名（私）のみ。他の業務もこなさなければならないので、日々の授業や校内研究で、精一杯である。(40代・18年度)

美術館からの働きかけはある

まだまだ学校現場では手さぐりの状態で、個々の取り組みを始めた段階。県立美術館からは意欲的な、学校への働きかけはある。(40代・19年度)

授業での鑑賞にとどまっている

近くに美術館はなく、もっぱら授業での鑑賞にとどまっている。(40代・19年度)

改善を考え中

近くにすぐ行ける美術館がないので、何をするにもバス代など、金銭的な問題が出てくる。改善しようにもどこから手をつけるかを考え中。(40代・20年度)

具体的に高まっていない

交流の機会が年に6回くらいで、具体的な取り組みにまで高まっていない。(40代・21年度)

美術館との連携はまだ

学校間（小・中学校）の連携はできているが、美術館等との連携はまだできていない。(40代・21年度)

情報入手ができない

各学校での鑑賞に対する取り組みの情報が入手できないため、鑑賞教育自体がどう行われているのか見えてこない。(40代・21年度)

学校全体では厳しいが

美術館が遠方のため、学校全体としての取り組みが厳しい面がある。個人的な面においては活動範囲はひろがった。(50代・19年度)

指導主事

よさが理解してもらえない

研修に参加しないと、なかなか鑑賞のよさが理解してもらえない。(40代・18年度)

学芸員

学校現場と教育委員会とのカベ等
学校現場と教育委員会との間のカベ、美術館サイドのスタッフ不足、学校に美術館を使うという発想自体がない。(30代・19年度)

難しさ感じている

情報発信が一方通行。先生方の集まりに参加しているが、あまり反応がない。学校が時間やお金などの制約にしばられている事情も理解できるので、連携の可能性をどこに見出せばよいのか難しさを感じている。(30代・19年度)

相乗効果が表れていない

学校をまきこんだ鑑賞教室は行っていたが、美術館と学校の相乗効果が表われていない。どちらかというとう一方的な気がする。(30代・19年度)

先生の異動により難しくなった

近隣校との連携が、その学校の先生の異動により難しくなったため（新たな関係づくりの必要がある）。(30代・19年度)

いまだ連携とは思えない

「鑑賞教育に関する連携」が私自身判然としていない。学校からのバスでの来館や、NPOとの授業等はあるが、美術館としてそれらはいまだ「教育」の意識に立った連携とは思えない。(30代・21年度)

組織としての連携ではない

指導主事と連携して当館を利用してもらい、鑑賞教育について情報を得ていたが、組織としての連携ではない。担当者の転勤等によりつながりがなくなることもあり得る。(40代・20年度)

アンケート 7

鑑賞教育に関して最も関心のある点・課題

小学校教諭

言葉だけがひとり歩き

鑑賞教育という言葉だけがひとり歩きしていること。教育活動現場と、美術館等の考え方の違いが課題だと思う。(20代・18年度)

つながり増やすことが重要

離島赴任ということもあり、美術館を利用した鑑賞教育に取り組みにくい現状がある。しかし、美術館の方で企画されている出前授業等の機会を利用しつつ計画的に年数をかけて地域の意識を変えていくことで面のつながりを増やしていくことが重要なかなと感じている。(30代・18年度)

作品によらない鑑賞

地域性のある鑑賞教育。作品によらない鑑賞教育。(30代・20年度)

機会と予算

子どもたちの鑑賞活動を行う機会の充実。美術館による教材(アートカード等)の開発のための予算。(30代・21年度)

大学との連携

関心があるのは大学(教育学部・美術科等)との連携。合科による鑑賞学習(社会科など)。実際の作品前での鑑賞。教員間の温度差、校外学習での移動費用が課題。(30代・21年度)

授業時間数の不足と意識改革

教師及び学芸員の意識改革。学校の授業時間数が不足していて、学校現場では鑑賞教育までまわらないように思う。(40代・18年度)

物理的問題(移動や人数)

美術館への移動にかかる物理的問題(移動手段・金銭的問題・日程含む)。クラスの児童数と望ましいギャラリートークの人数とのギャップ。(40代・19年度)

行政のサポート必要

美術館を活用した実践となると、

一部の学校・熱意ある教師に限られているのが現状。行政のサポートが必要だと思う。(40代・19年度)

表現の時間で精一杯

地域に美術館がなく本物を見る機会がない。図工の時間が限られており、表現の時間で精一杯。(40代・19年度)

ノウハウ学べる機会の充実

アートゲームにはとても関心がある。課題としては、近くに美術館がない学校での鑑賞の機会の充実や、教師のための鑑賞のノウハウを学べる機会の充実が求められる。(40代・20年度)

他クラスとの連携も

アートカード、アートゲームを使った鑑賞教育を積極的に取り入れたいと考えている。1クラスだけというわけにはいかないので他クラスとの連携も必要。(40代・21年度)

知的好奇心のくすぐり方

子どもの知的好奇心のくすぐり方(関心)。「感情的」に見ることに、「分析的」に見ることのつながりが課題。(40代・21年度)

美術館が遠い

地理的な問題として、美術館が遠いこと(片道1時間)。何度か、繰り返し行けると、もっと活動を深められると思う。(40代・21年度)

授業の中での鑑賞学習を

図画工作・美術科以外の(専門外の)先生方に、授業の中で鑑賞学習を取り入れてもらえるよう働きかけをしているが、なかなか受け入れてもらえない。(50代・18年度)

課題は教諭同士の温度差

関心がある点は負担にならず作品鑑賞が楽しめるワークシートの作成。課題は図工・美術が専門ではない教諭との鑑賞教育の温度差。(50代・18年度)

地域の美術館活用の手だてを

せっかく素晴らしい美術館がある

のに、学校規模、カリキュラム等から活かせないのが実態である。そんな中で地域の美術館をうまく活用できる手だてを考えることが今後の課題である。(50代・19年度)

わかりやすい研修、資料ほしい

小学校では、美術、特に鑑賞に対しての不安、自信のなさを感じている教師が多い。少しでも、わかりやすい研修を行い、鑑賞の楽しさを広めていきたい。資料は自作のものがほとんどで、なかなか作成する時間がない。手近に手に入るものがほしい。(50代・21年度)

本物に出合うチャンス

時間・予算・アクセス。本物に出合うチャンスを子どもにあげたい。自分自身はボランティアで美術館の鑑賞(子どもたちにする)の手伝いができたらと思う。そんな研修があればいいと考えている。(50代・21年度)

中学校教諭

実物見せたいが時間数厳しい

実物を見せたいという気持ちと、時間数の厳しさ。(20代・19年度)

時間を生み出しにくい

時間が少なくなったので鑑賞に費やす時間と、資料作成の時間を生み出しにくい。まだ美術館との距離がある。(30代・18年度)

導入ビデオ等、教材の充実を

短時間(10分くらい)の導入のためのビデオ(子ども向けにアニメなども入れた画家の生涯など)を充実してほしい。模写用のA4くらいの名画の写真など教材の充実。(30代・18年度)

資料少ない

生徒に提示する資料が少なく画集等から探している。実物に触れる機会もあるとよい。(30代・20年度)

授業を見合う環境ほしい

時間数が少ないため鑑賞の時間が

アンケート 7 鑑賞教育に関して最も関心のある点・課題（つづき）

多く取れない。もっと教員同士が授業を見合う環境がほしい。(30代・21年度)

障害がある子どもたちへの鑑賞
障害がある子どもたちに対する鑑賞教育。(30代・21年度)

日本美術を鑑賞する授業づくり
日本美術について、その心、「わび」「さび」「いき」「かぶく」等の精神を作品とともに鑑賞する授業作りが難しいと感じている。特にわび・さびについて。(40代・18年度)

つくり手のうしろ姿見せたい
制作者の生の生きざまや、言葉とといったつくり手のうしろ姿を見せたいと思っている。作品はひとり歩きするものだが、つくり手の評価やバイタルな面は制作過程にあると思う。(40代・18年度)

連携をどう授業に活かせるか
学校の授業形態の中で、いかに豊かな鑑賞活動が展開できるか（子ども自身が、考えを深めることができるために）、また、美術館との連携を授業にどう活かせるか。(40代・18年度)

作品の選択や時間内の授業展開
生徒に提示する作品の選択。50分内でまとめる対話型の授業展開。(40代・18年度)

学習の機会に恵まれない
ものづくりのよさをゆっくりに楽しむ時間が取れない。美術科の研修（地教委主催など）などが大変少なく、学習の機会に恵まれない。(40代・18年度)

学校職員全員の研修が必要
生徒も保護者も入試の教科でない授業は、学習だと思っていない。鑑賞教育への意識を高めるためには、学校の職員全員の研修が必要だと思う。(40代・18年度)

鑑賞から表現へつなぐ方法や教材
鑑賞の教育的な意義を周囲に理解してもらいながら授業を構築していくには、どのような取り組みが必要なのかと考えている。鑑賞か

ら表現へとつなげていくための方法や教材がほしい。(40代・19年度)

映像資料がほしい
生徒ばかりでなく親の関心がないこと。本物を見に行ける環境にないこと。映像などの資料が古い。10分ほどの興味深い映像資料がほしい。(40代・19年度)

本物見る機会を是非与えたい
近くに美術館はなく、貸し切りバスで行かなければならない。本物を見る機会を是非与えてやりたい。(40代・19年度)

教員自身の力量高めなくては
作家の作品の鑑賞、友達同志での作りつつある作品や仕上がった作品への鑑賞をどのように授業の中に組み込んでいくか。教員自身の力量を高めていかなくてはならない。(40代・19年度)

鑑賞だけで終了してしまう
鑑賞することを表現に繋げていくことは大切だと思うが、鑑賞だけで終了してしまう場合があり、そこが課題。(40代・20年度)

他教科との連携
考えさせる・子ども自らが知りたい・感じたい・観たいと思う指導のあり方は、美術だけの授業ではできないので他の教科との連携が大切だと思う。感じさせるためには知らせる学習、考える指導も必要だと感じる。(40代・20年度)

美術教育の時間少ない
中学校では、選択教科がなくなり、ますます美術教育の時間が少なくなっている。限られた時間で表現活動と鑑賞活動を充分に行うことが難しい。中学校3年間で行うべき鑑賞活動の内容の系統性をもう一度考えたい。言語活動の充実として、生徒によるギャラリートークやディスカッション活動に取り組んでいる。(40代・20年度)

作品選定に悩んでいる
限られた時数の中で、伝統や文化を守り、受け継ぐなど、何を教材

として扱い、指導していくかが切実な問題である。その中でじっくり鑑賞させる作品として何がよいのか、またその基準をどうするか、悩んでいる。(40代・20年度)

人材の育成が大事
生徒に何をどのように鑑賞させようかと、日々考え、試行するのに関心があり、楽しくやっている。鑑賞教育をリードする人材の育成が大事だと思う。(40代・20年度)

年間計画にうまく組み込めない
中学校美術の授業時間が少なく、年間の計画にうまく組み込めない。(40代・20年度)

子どもたちのつづやきの評価
対話型鑑賞、鑑賞における子どもたちのつづやきを、どのように記録し、評価していくか、等。(40代・20年度)

安定的で継続的な取り組みに
中学校の教育課程において、必修の時間設定が難しいため、安定的で継続的な取り組みにならない。(40代・21年度)

課題はネットワーク作り
地域の美術館や作家との交流。課題はネットワーク作り。(40代・21年度)

どうすれば楽しく活動できるか
授業のすすめ方が課題と感じている。中学生はどうしても口が重くなる年頃でどうすれば、楽しく活動ができるか考えている。(40代・21年度)

博物館との連携が増加
鑑賞教育と表現のリンク。当地域では美術館との連携は少なく、むしろ博物館との連携が増加している傾向がある。(50代・18年度)

取り組む時間が少ない
学校教育において授業時数との関係で「表現」に比べ、取り組む時間が少ない。校区における美術館等の施設に恵まれない。生徒の感性をひきだす術の研究（言語活動等）の深化。(50代・19年度)

教員の意識高める必要

鑑賞教育に関する教員の意識を高める必要がある。美術＝制作という意識は根強く、時間の削減もあって、なおさら鑑賞にあてる時間が少なくなりがちである。(50代・21年度)

指導主事

各地域ごとの研修が必要

東京でやることも大切だが、各地域ごとに開催するなど、もう少し参加しやすい研修が必要ではないだろうか。(40代・18年度)

評価への抵抗感なくしたい

関心のある点は、アートカードの有効な活用方法と、地域の材を活用する鑑賞。課題はすべての学校で取り組まれるようにすること、評価への教員の抵抗感をなくすること。(40代・19年度)

発達段階に応じた目標の設定

発達の段階に応じた、活動の目標設定。(40代・19年度)

校内や地域に教材や環境を

学校教育活動そのものが大変多岐にわたる上に多忙感があり、美術館に出かける鑑賞教室は実施しにくい実情がある。そのため、校内または地域に教材や環境を開発しなければならない。(40代・20年度)

交通手段の確保を

鑑賞教育における市立美術館のより一層の活用と、遠方の学校でも気軽に美術館を活用できる交通手段の確保。(40代・21年度)

管理職への働きかけが大切

指導者の研修の確保と、実践の場が不足していると思う。また、学校現場において鑑賞教育の重要性(＝教育的価値)が十分に伝わっていない。管理職への働きかけが大切。(40代・21年度)

学校全体としての位置付け

現在の中学校美術科の授業時数では、限られたことしかできない。学校全体として「鑑賞教育」をどのように位置付けるかが課題である。(40代・21年度)

ヌードやジェンダーの視点も

アートカードからヌード作品を抜く教師がいる。また、描かれる対象として女性が多すぎるとジェンダーの視点も含まれていると思う。学芸員の方たちは、すべての作品をありのまま見てほしいというジレンマがある、といったことに関心がある。(50代・18年度)

アビールできる鑑賞教育のあり方

現在小学校では言語活動の充実が求められている。鑑賞教育はその充実には欠かせないものになっている。そこで図画工作科が小学校の教科として必要なことをアビールできる鑑賞教育のあり方(方向性)を考える時期にきている。(50代・19年度)

教師にフリーパス制を

もっと子どもたちに本物を見せられる機会を作っていきたい。美術教師は、フリーパス制を導入してもらいたい。(50代・20年度)

学芸員

障害を持つ児童生徒との鑑賞

障害を持つ児童・生徒との鑑賞に関心がある。制作に偏ってしまう傾向がある。(20代・18年度)

どうやって情報を届けるか

関心を持っているだろう先生にどうやって情報を届けるか。(20代・18年度)

魅力の創出とアビール

多くの先生に関心を寄せてもらえるような魅力の創出と、どうアビールしていくかを内部でよく考えていく必要がある。(20代・19年度)

いかに興味持てる題材にできるか年代別のアプローチの仕方。いかに興味持てる題材に発展させることができるのか、ということ。(20代・19年度)

美術館と学校に温度差

先生の忙しさなどから、出前授業など行う場合についても、美術館側と学校側での温度差があり、ともに作り上げるという認識をどうやって持ってもらえるかという点が課題。(20代・20年度)

美術館が長期的ビジョンを持って

長期的ビジョンを持って、美術館の方針の一つとして教育普及・鑑賞教育の方針を立てること。現状だと個々の学芸員が日々の業務の中でこなしている感じがある。(20代・21年度)

来館できる学校がいつも同じ

学校へ実作品を持っていき、是非見て触れてほしいと思うが、毎回という訳にはいかないこと。また、美術館で実作品を前に鑑賞授業を行いたい、遠距離などの理由で、来館できる学校がいつも同じで広がりを持たせる活動に発展していかないこと。(30代・18年度)

中高生の鑑賞教育に悩む

対話型鑑賞の場合、どうしても作品の表面をなぞるだけで鑑賞が終わってしまいがち。そこからどのように作品そのものの鑑賞を深め、広げていけるか。特に中高生の鑑賞教育をどうしたらいいのか悩む。目の前に見えているものと、経験や知識を有効に結びつけていく作業に関心がある。(30代・18年度)

授業の流れにあったものを

学校の授業と連動した美術館における鑑賞教室ができると思う。授業の流れにあったものがやりたい。(30代・19年度)

学校とのスケジュール合わない

学校側に鑑賞教育に割く時間が少ない。美術館の特別展と学校側のスケジュールが合わない。(30代・19年度)

困難と醍醐味

一つの回答、見方に誘導することが鑑賞の目的だと誤解されている点。ただ感想を言わせればよいといった式のフリートークは作品の真価に導かない。これらの矛盾する要素のバランスの中に鑑賞教育の困難と醍醐味がある。(30代・19年度)

少しでも役立つトークをしたい

来場者にとって魅力ある鑑賞体験になりえているかということが1番の課題。初めて美術館に足を踏み入れる子どもから、年配の方までを相手に話すことを考えたときに、少しでも役立つようなトーク

アンケート 7 鑑賞教育に関して最も関心のある点・課題（つづき）

をしたいと思う。(30代・20年度)
 まずは1度でも美術館に
 まずは、「1度でも美術館に来たこ
 とがある」教員の割合を増やすこ
 とだと思う。(30代・21年度)

普及グッズがカギ

美術館と学校の連携方法を探って
 おり、普及グッズがカギになると
 考えている。現在教員の研修を行
 う仕事に変わったので、この立場
 を生かした連携を行いたいと考え
 ている。(30代・21年度)

学校と美術館をつなぐ

先生にとって、より分かりやすい
 説明資料を作成すること。学校と
 美術館をつなぐ、先生方対象の授
 業研究会をより魅力のあるもの
 とし、参加者を増やすこと。(40代・
 18年度)

自分ももっと勉強しなければ
 発達段階に合った鑑賞の素材。見
 せる作品と作家について、(全てを
 語らないにしても)自分自身ももっ
 と勉強しなければというところが
 課題。(40代・20年度)

自身の鑑賞能力高めなくては

自分も含めて対話型鑑賞を行う機
 会は多いが、自分の力量不足でな
 かなか深い鑑賞にまで持っていく
 ことができない。対話型が全てで
 はなく、問題点もあると思う。1
 つの型にはまらない鑑賞方法、そ
 れには、自分自身の作品鑑賞能力
 を高めなくてはと感じている。(40
 代・20年度)

学芸員だからこそできること

美術館で学芸員が行う鑑賞活動は、
 作品がそこにあることを踏まえた

上でスタートさせたい。学校の鑑
 賞教育と重なる部分もあるが、美
 術館だからこそ、作品を知る学芸
 員だからこそできる部分を大切に
 したい。(40代・20年度)

美術館では果たしてどうなのか

学校教育ならば児童・生徒らに思
 うまを発言させればいいのかもし
 れないが美術館では果たしてどう
 なのか。(40代・21年度)

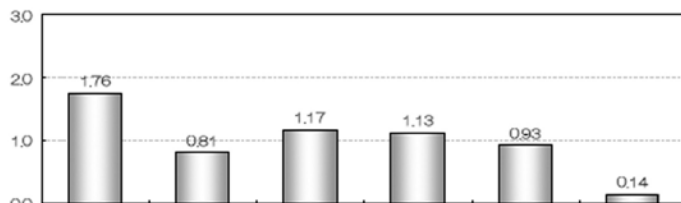
テキストでは捨象されること多い
 ガイドブック、テキストにすると、
 捨象されることが多すぎて、難し
 さを感じている。(40代・21年度)

多人数への対処

展示室内で、修学旅行生や団体等
 の多人数に対してどのように対処
 したらよいか。(50代・20年度)

アンケート 8

鑑賞教育に関して「国立美術館」に期待すること（加重平均値）



		n	指導者研修の継続	専門的な研究会・シンポジウム開催など	アートカードなどの教材の開発・紹介・貸出し	鑑賞教育に関する書籍や数冊向けガイドの発行	鑑賞教育に関する情報ネットワークの提供	その他
	TOTAL	243	1.76	0.81	1.17	1.13	0.93	0.14
研修参加時の職種	小学校教諭	78	1.77	0.62	1.53	0.95	0.90	0.19
	中学校教諭	77	1.74	0.56	1.31	1.30	0.99	0.10
	指導主事	28	2.00	0.75	1.46	1.04	0.61	0.14
	美術館学芸員	60	1.67	1.42	0.40	1.18	1.03	0.10
研修参加時の年齢	20代	18	1.78	1.50	0.39	1.00	0.89	0.44
	30代	64	1.75	0.95	0.98	1.23	0.91	0.05
	40代	127	1.77	0.75	1.28	1.14	0.86	0.14
研修参加年度（最近）	50代	33	1.76	0.42	1.61	0.88	1.21	0.12
	18年度	57	1.67	0.91	0.84	1.12	1.11	0.23
	19年度	66	1.70	0.71	1.32	1.29	0.79	0.09
	20年度	50	1.92	1.00	1.04	1.06	0.88	0.08
	21年度	70	1.79	0.69	1.40	1.03	0.94	0.14

※加重平均値の算出方法

1位に3、2位に2、3位に1、順位なしに0、のウエイトを与えその合計を該当サンプル数で除す



5年間の研修をふりかえって

指導者研修のこれまでとこれから

司会・進行

一條彰子（東京国立近代美術館企画課／国立美術館本部事務局 主任研究員）

◆アンケートとヒアリング調査

平成17年冬、指導者研修をスタートさせるにあたり、私たちは研修を、各地で行われている実践や研究を結ぶ結節点（ハブ）としてイメージし、情報交換と課題検討の場として機能させたいと考えました。また、全国から集まった受講者には、研修で得たものを持ち帰り、地域での鑑賞教育の拠点となっていたいただきたいと願いました。その目的は果たされたのでしょうか。

平成22年春、国立美術館は過去4回の受講者全員にアンケートを送り、243名から回答を得ました（→アンケート抜粋 p.155～p.172）。そこからは、多くの方が研修によって鑑賞教育の知識やスキルを向上させ、新しい取り組みに挑戦し、その成果を職場や地域に還元させたことがわかります。ヒアリングレポート（→p.139～p.152）からも、教員、指導主事、学芸員が、それぞれの立場で研修の体験を活かしていることがうかがえます。「年度が違っても同じ地域から参加することで、鑑賞教育に対する共通の土台を持つことができた」という声にも注目すべきでしょう。これは、継続して研修を行うことの大切さを示しています。鑑賞教育は今、熱心な教員や学芸員だけが孤軍奮闘するという時代を、脱しつつあるように見えます。



第5回2日目のワールドカフェ

◆更新し続けた研修プログラム

指導者研修のプログラム作りは、模索と反省の繰り返しでした。立ち上げるのに精一杯だった初年度に始まり、新美術館の広い空間を得た2年目、新学習指導要領を意識し分科会を設けた3年目、関心事別に14チームのグループワークを行った4年目と、常によりよい研修を目指してプログラムを更新し続けました。

5年目に登場したワールドカフェは、メンバーを変えながら小グループで話し合うことで集合知を生み出そうとする討議手法です。「子どもの学び」や「鑑賞の意味」をテーマに、テーブルを渡り歩いて話し合いを続ける人々は、花を巡って蜜を集める蜂になぞられました。それはこの研修の姿を象徴しているようでした。この研修が、鑑賞教育の指導法を一方的に伝授する場ではなく、本質的な問い（鑑賞の喜びとは何か、なぜ鑑賞教育が必要なのかなど）について、教員や学芸員自身が考える場であったことを、あらためて振り返らせる光景でした。

◆今後に向けて

5年目の今年は、研修の今後を考える年でもありました。委員会と法人内で検討を重ねた結果、外部からの高い評価と継続を求める声に応え、研修の続行を決定しました。日程やプログラムについては、これまでの受講者の声などをできる限り反映し、より密度の高い内容となるよう再考します。平成23年度は、国立西洋美術館のコレクションを活用して開催する予定です。

さて、さらに5年後には、日本の鑑賞教育の姿はどのようなになっているのでしょうか。